



女學全書

第二編

百人一首畧解全



下野遠光著

第五版

百人一首畧解

東京 博文館藏版

百人一首略解序

百首歌のかう世に名高うなりたるはいかなるゆゑよしかりけん小倉山むかしの跡はあらねと今ちりほひのこれる筆のあとを見るにも秋の田をかりそめのわさまで教艸なとことなてゝえらみしにはあらざるへし今は世にあまねくおこなはれてたきゝこる賤まほくむ蚤にいたるまで見おほえ聞きなれてうたはぬものとはなかるへしされは手習ふとは浪花津安積山にかへ歌ふむとは古今後撰の集よりもまつこれをとおりつることゝはなりたれまかはあれとをのあとのいかなることゝともわさかたくなは知るへうもおもはをなむこれのちうさくともおほく世に聞えてはあれとを

れときゝをむはなか／＼にたやまからぬわさなれは見る人
さへままれなりしをこたひ下野ぬしかものせしこれの略解
よいとつゝまやかたして少しあかぬふしもまされゝと言葉
たひらかにして心としかなれはうひまなひのともから歌の
山口ふみわけむにはこよなうたよりよかるへしいてやこの
ふみ世よいてむにははかなきをみかこともにもさととりやを
くえやをくしてこの道のたをけともなりぬへくあなちや
うなきまさはあらさるへしいまこれかはし一言をとこ
はるゝにいなふへきふしもなければおもふかまゝをたゝか
くなむまかやのあるし勤あるす

凡 例

- 一 此の書固、婦女兒童和歌を好む者の爲にものせしものなれば、大方の覽に供へんとにはあらず。
- 一 此の書は、眞淵景樹等諸大家の説の是非を、己が考を以て取捨したるまでなれば、己の説といふにしもあらず、されど誤謬は己のなり。
- 一 作者の傳は、全く大畧を記し、のみ、其履歴の明かならざるものは、其儘とし、あながち牽強附會の説をいはず、後人を誤まらんを恐れてなり。
- 一 題の註解は、畧して言はず、又解しがたきものも無かるべし。
- 一 註は、解しがたからんと思ひたるもののみを、簡畧に述べたるまでなり。
- 一 解は、註のみにては、解し易からざるもあらんとてものせしなり。
- 一 或云は、捨てばやと思ひたれと、餘白ありしかば、掲げつ、固より益無きもの多し、此の書總て簡畧を主として作りたるは、初學、異見、一夕話等は、皆くだくしくして、初學のものに不便なりと思ひたればなり。
- 一 詳細を知らむとすれば、左の書を讀むこそよからめ。

百人一首宗祇抄	同	雨底記
同 (前後抄)	同	秘注
同 萬葉	同	古説
同 辯蒙抄	同	初學
同 師説抄	同	異見
同 拾穂抄	同	一夕話
同 拾穂抄補注	同	新抄
同 改觀抄	同	其他の書類

百人一首の起因

百人一首の歌は、定家卿が小倉の山莊の障子の色紙に書きたるものなり。小倉山は嵯峨に在りて、龜尾山の西北にあたり。山莊とは、唐人の別業を呼びて、莊と作るよりいふものなり。此の山莊の跡は、小倉の常寂寺の内にありて、彼の色紙も今の世に残れり。其の大小異なるは、其障子の大小によりておしたる故にや。故の色紙に其名なくして、今のに其の名あるは、子爲家の寫したる時、作者を記したるものなり。

そも、此百首の起因は、初め新古今を通具有家、家隆雅經及び定家卿の五人にて撰ぶ時、不幸にして卿父の喪にあたりければ、已が心に協はざることも多く出て來て花を本とし、實を末としたるやうなりたれば、殊更に古今の歌數萬首の中より、實あるもの百首を取り出して、態々色紙に記し、その障子におさせしを、百人にて一首づゝなれば、百人一首とはいふなり。道家の山莊の障子に、歌合の歌を書きしことも、史に見ゆ。何れも藤子京といひし人、岳陽樓を造りて、唐賢今人の詩賦を彫みたることに倣ひしものなりけん。

思ふに此百首は爲家の時より、初めて世に公になりたるものにて、初めは定家卿、人

の怨を恐れて秘しおき、又前にもいふ如く、其作者の名さへ書かずありしなり。うは當時の風として、歌の勝負撰否より、家をも破り、身をも亡ぼすこともありたるゆゑなりけん。徳望ある人の歌、歌聖といはるゝ人の歌、當座即妙の歌なを多く入れり。人或はいふ、百首中戀ならざるは指折るほどなれば、少年をして讀ましめなば淫風に染めしめんといふ理ある言なれど、己は中々に、今の少年は、聖行文にのみ耽りて、是等の歌の真心を解し能はざるを恐るゝなり。又定家卿の時の風俗は今の世とは異なるものなれば、こればかりの戀歌は、普通の歌と思ひしものなりけん。二條家の歌の骨髓は、茲に在るものなれば、見む人よく見讀まむ人よく讀め、もし暇あらば。

附言、定家卿の日記なりとて、名高き明月記に、文暦二年五月二十七日予本自不知文字事、嵯峨中院障子色紙形故予可書之旨彼入道（嵯峨）懇切難極見苦、愁、染筆送之古來人歌各一首上自天智天皇以來及家隆雅經云々と作るより、此の起因に就きて、眞淵景樹等の諸大家各々説あれども、くだくしければ、茲には記さず後日委しく言はんとてなり。

定家卿本傳

藤原定家卿は御堂關白道長の後、父は歌道の達人なる五條三位俊成母は美福門院の女房伯耆といへる、若狹守親忠の女なり、應保二年（壬午）に生る。始めの名は光季といひしが、後季光と改め、又今の如く更めたり。世に小倉黃門といひ京極黃門と稱へ、或は京極中納言と名け、一書に戸部尙書に作れり、蓋し戸部尙書は民部卿の唐名、黃門は中納言のなればなり。治承壽永の間、正五位下に叙せられしが、文治元年殿上に於て源雅行と忿争しける時、劍にて其の頬を撃ちし故を以て、跡を除かれたり。されば父俊成深く之を憂へ、歌を作りて、其意を寓せしに、後白河法皇之を聞き、特旨を以て、本位に復さしめたり。同五年に左近衛少將に進み、因幡安藝權介を兼ね、正四位下に叙せらる。建仁中左兵衛權中將に任ぜられ、美濃介を兼ね、建曆三年從三位に進み、建保年間參議に任ぜられ、治部卿となり、正三位に進み、尋いで民部卿に遷る。貞應元年參議を辭し、安貞元年正二位に進められたり。卿、琴道に長けたりと雖も、資性極めて競躁にして、進取に急、自ら才氣を負ひて、常に沈滞の意を、其の作る所に含めり。父俊成位は三位にして終りけるに、卿に至り二位に叙せられしかば、自ら大に喜びて人

臣の榮正に極れりといひけるを、貞永元年權中納言に進み、帶劔を許されしが、天福元年出家して、名を明靜と改めけり、こは止觀明靜。前代未聞の義なりとかや。仁治二年八月二十日、年八十にして化す。

初め俊成時の歌人基俊より和歌の道を授かり、嘗て後鳥羽帝の師たりしが、卿も亦幼より歌道に明なりければ、天皇嘗て卿を小御所に召して、和歌を判せしめ、且つ面諭して曰く、卿を延いて茲に至らしむるは、朕の卿を遇すること、決して薄きにあらず、卿も亦宜しく寵渥を盡して遇避することあるなかれ、若し知つて言はざれば、是れ朕が卿を召すの意にあらずといひければ、卿其の優遇に落涙したりと云ふ。新古今集は、後鳥羽院の院宣によりて卿を始め、適具有家、家隆雅經の四人が撰進せしものなり。其後後堀河帝の勅命によりて、新勅撰和歌集を撰びしが、卿帝の禪位の志あるを知り、日夜擇撰急に編を成して奉れりといふ。

卿の著述し、又は訂正したる書籍少なからず。古今和歌集の證本を定め、密書を記し、後撰集を勘考し、三代集の僻家抄を著し、伊勢物語を折衷し、源氏物語に青表紙を殘し、土佐大和をも清寫せり。家集は拾遺愚草といひ、日記は明月記と名く、後のは、元文

年中佳吉に寓居せし時綴りしものにて、前者は侍從を兼ねたる時の作なり。又梶井宮法親王の發起にて、歌歌大概を書き、後世の模本を定め、假名遣をも一定して後學の迷ひを開けり。

蓋卿の歌道に於けるは、之を天に稟け、且つ自ら出精鍛練したるによる。卿又史傳を獵涉し、詩を賦し、文を作り、兼ねて弓馬の道に長けたり。古史にいへるあり、和歌の才は縱横馳騁精微を盡し、興義秘脫極めざるはなし。其家に在りて歌を造る、必ず南面を洞開して、遠くをも望むべくし、整襟端坐し、いはく、平常清肅の裡に於いて、之を習ふときは、則ち至尊の前に於いても、失錯狼狽することなしといへり。又毎に、凡そ和歌を作るに臨み、先づ故郷有母秋風、淚旅館無人暮雨魂、蘭省花時錦帳下、關山雨夜草庵中、の句を簡せば、則ち意格自ら高妙なりと云へり。其心を用ゐるの周到なること此の如し。されば遂に敷島の道を傍若無人に濶歩して、數百年の今日までも、歌人社會に尊ばるゝに至る。あはれ超凡の人たらんと望むもの、自ら超凡の行なくてやば。

定家卿の父祖

○道長
即子御堂關白、
攝政兼家ノ男、

後拾遺作者、
號二條

大納言、正二位
道長ノ六男

長家

後拾遺、新古今、
新勅撰等作者、
號小野宮、
大納言、正二位、
長家ノ男

忠家

新古今、新勅撰、金葉、
詞花千載等作者、
權中納言、從三位、
忠家ノ男

俊忠

千載撰者、號五條三位、
俊忠ノ男

俊成

定家

續後拾遺集撰者、
大納言、民部卿、
定家卿ノ弟

爲家

百人一首略解

下野遠光著

天智天皇

舒明天皇の嫡子にして母は皇極女帝なり。天皇幼より英明未だ皇子たりしとき、中臣鎌足と謀りて、逆臣蘇我入鹿を誅し、位に即きて後、専ら心を政治に用ゐる律令を定め、學校を興じ、文明の基を開けり。壽四十二にして崩す。帝學を好み、巧に歌を讀み、又文を作れり。世に名高き朝倉木丸殿の歌は、天皇の御製なり。

○後撰集
中題しらす

歌をよみたるとき、よく知られぬを、後人が題しらすといひたるものにて、上古は皆實際に詠じたるものなれば、後世の如く題などは無かりしを、寛平の頃より始まれり。後、詩歌を弄ぶに至り、題作愈々盛に

秋の田のかりほの庵のどまをあらみ

なれり。

我衣手はつゆにぬれつゝ

(註)

一、かりほは假菴にて、假ろめに作りし菴のとなり刈穂と心得るべからず萬葉集にも借廬とあり、かりほと云ふは四字を約めたる也。

一、いはは菴也、かりほのいはとつゝけたるは十日の日、四日の日といふ類なり。

一、どまは普通の屋根にあらすして、宮を重ねたるもの。

一、あらみは宮の重ね方のあらきことなり、みは俗のさゝに同じ。

一、衣手は袖のこと。

一、つゝといふに二種あり、是をしなから又彼をするといふ時は乍の意なり、此歌のつゝの如きは類に其事の重なることなり、必竟大なる差別なし。

(解)

秋の田なる番小屋の宮の透間より露がもりて、附番をして居る民が自分、我の袖はぬれにぬれても、必死になりて守り居るは、さぞわびしからんと、天皇が思

召されたるなり。

○或云秋の田てふ歌は天智天皇の大御歌ならぬこと、げにもまことにして、歌の姿を知りたらん人は、誰も疑ふものもあるまじ、云々。

○或云、時過ぎたる假菴にて、田を守る民の心を盡すを御覽じて、不便の業かなと天子の御袖に涙をかけられたるを、我衣手は露にぬれつゝと讀まれたるなり、云々。

附言或、云は己の説とは異なれど、右の名家の説なれば、茲に記せり、固より、誤謬陳腐の論もあるべし、讀まむ人その心してよ。

持統天皇

第四十二代の帝にして、諱は寛野といふ、天智帝の第二の女、天武帝の後なり、天武を輔けて、朝政を執りしが、天武崩じて後、位に即けり、その文藝に長したるは、其父に似たりと、史に見ゆ、母、蘇我石川麁ノ女ナリ

○新古今集夏題しらす

此の處の註前に同じ

春すぎて夏來にけらし白妙の

衣ほすてふあまのかくやま

(註)

一夏來にけらしは夏が來たらしいと云ふ俗語に同じ。

一白妙は極めて明白なるを云ふ。

一ほすてふはほすといふを約めたるなり。

一香久山は大和國十市郡に在り。

(解)

天の香久山にましろなる衣をほして夏着の用意をするを、人が云へば知らざるうちに、もう春が過ぎて夏が來たらしい、このころなり。

○或云、天香久山春過ぎぬれば、霞も立ち散じて、首夏の天に、此山明白に見ゆるを、白妙の衣ほすとはいへり、夏來りて霞の衣を捨て、山の明白な

るを白妙の衣ほすといふ給へり、香久山の久の字は清みて讀むべし、云々。
○或云、此歌は萬葉集一の卷藤原宮御宇天皇代天皇御製歌、春過ぎて夏きたるらし、白妙の衣ほしたり、天の香來山とあり、今は之をよみひがめられたるなり、云々。

柿本人丸

持統文武の兩朝に仕へし有名なる歌人なり、然れども官位共に卑しくして、いまだ其辭なるを知らず、和歌を作る頗る特殊に長歌の如きは空前絶後なり、後世歌聖と稱す、孝昭天皇々子天押帶彥命ノ裔ナリ

○拾遺集三題しらす

天智天皇の註に同じ、以下皆記さす。

あし引の山鳥の尾のしだりをの

なかくし夜を獨かもねん

(註)

一あし引は枕詞にて意なし。

「い」たりをほしだり、柳、だり標などのことく、長く下に垂ることなり。此處までは序にて歌の意にはあつからず、唯々下句の長の字をいはん爲めなり。

「ながく」し夜は最ト長き夜の意なり、なかくしき夜とき字ある方正しからんか。

一獨りかゝねんは俗語に獨りで寐やうかなアと嘆息する意なり。

(解)

かうも長い夜を、曰が思ふ人と共に寐すして獨りで寐やうかなアさてく、つらくわびしいことよ、といふ意なり。

○或云山鳥は夜は雌雄處を異にするといふより、秋の夜の長き頃は夜寒にもそひて、愈々獨寐の苦きに、山鳥にもあらぬ身の、猶其鳥の如くに獨りでねんかどわびたるこゝろ也、云々。

或云昔より右の如く讀まれたれど、あしびきの、山鳥の、尾の、したり、尾の、

ながき長夜を、いどりかゝねん、とある方正しかるべし、云々。

山邊赤人

古今集の序に「また山邊の赤人といふ人ありけり、歌にあやしく妙なりけり、人丸は赤人が上に立たんことかたく、赤人は人丸が下にたゝんことかたくなんありける」とあれば其和歌に工みなりしことを推して知るべし、養老神龜の頃の人なり、世に山柿と稱へて、人丸と其名を同うす、正六位上ニ叙セラル、播磨國司來目部小楠、賜山部姓、裔ナリ

○新古今集冬題しらす

田子のうらに打ち出て、見れば白妙の

富士の高根に雪はふりつゝ

(註) 一田子の浦は駿河國の名所なり。

一打出てゝはわざと濱邊にさし出てゝ見るとなり、打は語勢をつけん爲の文字にて、援捨の振の字の如し。

一白妙は前に委し、一説にましろに。富士の高根に雪はふりけるといふ、又田子の浦にゆきとしたるもありゆは従にてよりなり。

一富士の高根は日本一の高山なる駿河の富士の山のことなり。

一つゝも前に在り。

(解)

田子の浦のよきけしきは、詞にも盡しがたいが、海邊に打ち出てゝ見れば雪がましろにありたる富士の山のおもしろき景色も見ゆる、との意。

○或云冬都に入れたるは如何なることわりぞもとよりいつとは知らざれど、打出てゝ見愛てたる景色にも、時じく雪は降りけるといへるにも中々冬にては叶はざると吟じて知るべし、雑都などに入るべし、云々。

猿丸太夫

官位時代等を知りがたし、或云聖德太子の孫弓削王の別名なりといふ、山柿につぎての歌人なり。

○古今集上是貞のみこの家の歌合のうた

れく山に紅葉ふみわけなく鹿の

聲きく時ぞ秋はかなしき

(註)

一奥山には山のその又奥なる山のことにて、外山端山に向へる名なり、には此處のはにての義なり。

一紅葉はかならずしも楓の類をいふのみにあらず、凡ての枯葉落葉をいふ。

一ふみわけは鹿がふみちらすことなり、人が踏み散らすと心得るは大によろしからず。

一時ぞのうの字ありて、さらに悲しきことをいふ也。

(解)

あきはすべてのこと、かなしきものなるに、山の奥にて、紅葉をふみわけながら
鳴く鹿の聲を聞けば、殊更にかなしいとの意。

○或云菅家の詩に秋山寂々葉零々、麋鹿鳴音數所聆、勝地尋來遊宴處、無朋
無酒意猶冷とあれば、人の踏み分るにや、何れにても此紅葉ふみ分るは
秋更はてゝの落葉にあらず、木葉は奥山より色付きて、端山は後也、云々。

中納言家持

姪は大伴天智天皇の後裔、大納言旅人の子なり、天平の頃從五位に叙
し、越中守に任ぜられ、和暦二年中納言に進めり、和歌を善くし、和歌者
流の模範とする萬葉集を撰びしは此人なりともいふ。

○新古今集
冬題しらす

かさゝぎの渡せる橋におく霜の

白きを見れば夜うふけにける

(註)

一、かさゝぎ、云々は淮南子か云へる、鳥鵲填河成橋、以渡織女と云ふ句より出で
たるか、天の川を廣く指したるまどなり。

一、かく霜は俗語にて降つた霜といふに同じ。

一、或書に置く霜といふも、降りたる霜にあらず、こゝの意は冬の夜の空、宛がら
霜の満ちたる様な体をいふなりと作る。

(解)

白き霜の天地に満ちたるを見れば、もはや夜は十分に更けて來て、寒さも身に
透るやうなりとの意なり。

○或云此初句別段の深き意なくして、鵲のわたせる橋にかくといふ、其霜
の白きを見ればといふ意はへなり、又この鵲橋を大方霜の縁に用ゐる來
りたるは、人跡板橋霜などいひて、橋には霜のいちじるしきものなる故
なり、云々。

○或云、鳥鵲橋は、先づ大内の御橋を天にたどへり、さて、これは嚴なる

宮中の冬夜に、御橋の霜の白きを見て、夜の更けたる事を知るといふなり、云々。

安倍仲麿

文武天皇大寶元年生れ、元正天皇靈龜二年に遣唐留學生となりて入唐す、時に年僅に十六、強記絶倫、内外の人を驚かせり、其の唐に在るや顯官に擢んでらる、遂に彼の國にて年七十にして卒す、王維李白などを友として、詩文を善くせり、此天の、原の和歌を譯して唐人に示したるに人皆涙を流して感嘆したりと云ふ、儒者にして外人にまで尊崇せられしは、吉備公を除きては、仲麿第一なり。

○古今集もろこしにて月を見て讀みける

天の原ふりさけ見れば春日なる

三笠の山に出でし月かも

二、天の原は青空のことなり、原といふは野原の原の如く、廣きことに付いて云ふなり。

一、ふり、さけ、見れば、は仰ぎ見ることなり。

一、春日なるのなるはに在るを約めたるなり

二、三笠山は奈良の東にありて、此邊は仲麿の故郷に在る時、住みなれしところなり。

二、かも、は嘆きのこゝろをも含めり。

(解)

青空を仰ぎ見れば、月が面白く出てゝ居るが、あの月は、かねて故郷に在つたとき、春日に在る三笠の山から出たその月とかなじものか、あゝ故郷かこひしいと云ふ意なり。

○或云古今集には天の原とあるを、土佐日記には青海原云々と書きたるは、固より二様に傳へたるか、云々。

喜撰法師

基泉といひ、窺仙と書き、又喜仙と作る、桓武天皇の後裔なり、宇治山に
隠栖して、穀類を絶ち、長生を求めしが、或日一群の白雲に誘はれ、何處
ともなく往きしまゝに歸らずといふ。

○古今集
下題しらす

我が庵は都の辰巳しかぞ住む

世をうちやまと人はいふなり

(註)

一辰巳は、宇治山が都の辰巳に在ればなり。

一しかぞ住むは、かやうにの意なり、宇治山に住む鹿なりと心得るは、大なる誤
なり。

一世をうちやまは世の中を憂きといひかけたるなり。

(解)

我が庵はやがて都の辰巳にて、世をうちやまそのみ人の常にいふ、その憂きと

ころに、世の事をさけて、よく住み治めて居る、その意なり。

○或云、己は都の巽なる宇治山に隠れて、世の中の憂きことを知らぬに、人
々はうき世ぞといひて居るよ、云々。

○或云、我庵は都の辰巳なる、宇治山に在れば、世間の事を、憂きものと思ひ
て、隠遁したと、人は噂すなり、その意なり、云々。

小野小町

小町はその出つるところも、終る時も明かならず、或は參議後文にありの孫女なりといふ、歌に長けたるを見れば、さもありけん、徒然草に、小
町が事極めて定かならず、衰へたるさまは、玉造といふ書に見えられ
と、此書は清行が書けりといふ説あれど、高野大師の御作の目録に入
れり、大師は承和の初めかくれ給へり、小町が盛りなる事、其後のこと
にや、猶覺束なしとあり、又古今集の序に、小町は衣通すゝもといふの流なり、あは

れなる様にて強からずいはゞ美き女のなやめるところあらんに似たり、強からぬは女なればなるべし、といへり。

古今集
春下題しらす

花の色はうつりにけりないたづら

我身世にふるながめせし間に

(註)

一、うつりは花の散ること、我身の老衰することゝに通はせたり。

一、けりなのは嘆息の詞にて、俗語の悲しいなアのなアに同じ。

一、ふるは雨の降ることゝ世を経ることゝに通はせたり。

一、なかも亦長雨と眺めどに通はせたるなり。

(解)

何事もせずしてうつら／＼ながめて居る内に花が長雨に逢ふて憔悴するやうにも、花の如き姿の已も年を経ることに衰へたり、どの嘆息なり。

○或云、此歌表裏の二説ありて、表は花の咲きたらば花に身をなさんと思ひしに、世に住めば事しげくて、兎や角と打ちまざれて過しつる程に花

の盛もうつりけりなどなり。裏は身の衰も吾れと得知らぬものなり、花のうつるふを見て、吾が身の花も、斯くうつりてこそあらめ、と思ひ遣る義なり、云々。

蟬丸

仁明帝の時、道人なり、盲目なれど、和歌を善くし、又琵琶にも堪能なり。其曲に流泉啄木といふものありけるを、極めて秘して弾せず。時に博雅三位も亦琵琶に精しく、いかにしてか蟬丸の秘傳を獲んと、毎夕蟬丸の巷に通ふこと三年、値ま中秋の月雲に遮ぎられ、風の音虫の聲いと凄き夜、初めて蟬丸に逢ふて、其深情を通ずるを得て、遂に其秘曲を授かりたりといふ。或説、蟬丸、延喜帝第四皇子ナリト云フ。

○後撰集
逢坂の關に庵室を作りて住みけるに行かふ人を見て

これやこの行くもかへるも別れては

知るもしらぬも逢坂の關

(註)

一、ふれやこのはこれがかの兼ねて聞きし云々の逢坂と云ふ意にて、やは疑ふ意、このは彼のなり。

一行くも歸るもは關を出る人も入る人もといふこと。

一、別れてはは末の句の逢坂に直き續けて意味解き易し、一本に別れつゝいふことあり。

二、知るも知らぬもは顔を知つた人もまた知らぬ人もといふの意。

一、逢坂は近江道に出る關なり、人が逢ふことに通はせたり。

(解)

これが常に東へ行く人も都へ歸る人も此處にて別かれ又顔を知つた人も知らない人も此處にて相逢ふも兼ねて聞いたる彼の逢坂の關かといへたるなり。

○或云、是は旅行く人の歌めりしならん、其處に處作りて常に住み居る人のこれやこのといふべくもあらず、云々。

○或云、別かれども別れば又必ず逢ふ習ひにて、行くは歸り、歸るは更に行きて知るも知らぬも又皆逢へば逢坂と名けしは、是やこの故なりとの意なりといふへし、云々。

参議堂

参議岑守の子なり、幼かりし頃常に弓馬を好みて、學文を修めざりしかば、醍醐帝聞いて嘆じて曰く、斯人にして猶弓馬の士となる乎といへり。是より簞前非を悔え、初めて大に學に志し、文章生より起りて、從三位の榮を得たり。置母に事へて孝順、真性多能書畫、歌詩等皆人に勝り、平生作るどころの詩の如きは往々樂天と句格を同うせるものありきといふ。然れども人となり不羈、獨立人に屈するを好まざれば、當世の爲に容られず、其才を忌む者呼びて野狂といへり。蓋し野狂は野簞と音相通すればなり。

○古今集 竊 旅 隠岐の國に流されける時舟にのりて、出立とて、京なる人の許に遣はしける、

わたの原八十島かけて漕出でぬと

人には告げよあまの釣船

(註)

一わたの原とは海の事。

一八十島は島の多きをいひたるなり、かならずしも八十個にはあらず。

一かけては向けてなり。

一漕出でぬは漕いで出だとなり。

一あまは海士なり。

(解)

廣々とした海に出て、今數多き島の方へ、漕いで行つた、と都に居る人達へ告げて呉れ給へ、其處に見ゆる釣船よ、汝の外には使るべきものなし、惟此のやうすを言つて呉れるものは汝ばかりと、の意也。

○或云、多くの島を漕離れて、更に此國の境を離るゝは、世界の外のやうに

覺ゆる悲しさ、吾思ひの切なる程を知り人にて傳へまほしきを、さながら罪ある身なれば、其人と指してはいひがたく、依つて人には告げよ、釐の釣船と大やうにいへり、心なき舟に、人には告げよといへる心減深し云々。

僧正遍昭

俗名は眞峯宗貞と稱し、大納言安世の子なり。仕へて從五位上左近衛少將となれり。在俗の時殊に仁明帝の寵を受けしが、帝崩して後哀慕曰、むこと無く遂に僧となり、報恩を求めり。寛平二年正月二十九日化す。年七十四。子二人あり。兄、右近將監玄利(台素性)弟、弘延ト云ヒリ。

○古今集 雜 上 五節の舞姫を見てよめる

あまつ風雲の通路吹きとちよ

乙女のすがたしはしとゞめん

(註)

一あまつ風は空吹く風なり。

一雲の通路とは乙女を全体天人になしたれば、其天女の行き通ふ路のことなり。

一吹とちよとは雲を重ね集めて行く道を塞げて呉れるの意。

一乙女のすがたとは乙女は少女の事にて、萬葉集には未通女とも書けり、すがたの三字心を附けて讀むべし。

一しばしは俗に云ふちよとなり。

(解)

空を吹く風よ、舞姫が今に歸るであらうが、うつくしい姿は、どうも恐れられな
いによつて、雲をあつめて、ちよとなりとも、とめてくれまいか、との意。

○或云只今舞はてゝ天上に歸るべきなればとめんとしたれども、固より天女なれば人間のなすべきにあらずれば、風の力にて天に在る雲を
とちてよと云ふ意にて、舞姫の美麗なるを天女に譬へたるなり云々。

陽成院

諱は貞明、清和天皇の子、母は藤原高子といひ、中納言良真の女なり。帝
若かりし時、政治を省みずして、淫樂にのみ耽けりしかば、基經の爲に
廢せられて、太上天皇と號せられたり、時に帝僅に十七、天曆三年八十

二にて崩す。

○後撰集三つり殿のみこにつかはしける

筑波根のみねより落つるみなの川

戀ぞつもありて淵となりぬる

(註)

一筑波は常陸國の名山なり。

一みなの川は一本に常州の名所とあれど、覺束なし、又水無川みなのみなどなりた
るなりといふ説あり、孰れにしても此句の下に、の如く三字を入れて讀む
べし。

一淵は川の深きところを云ふ。

(解)

初めは別段戀ひしいとも思はざりしに、追々に思ひが積もりて、みな川のやうに、今では底も知れない程の深き中になりたり、といふ意なり。

○或云、戀ぞつもりてとあるは、水ぞたまりてとある方正しくして、水といふは泥土といふ故なり、云々。

河原左大臣

嵯峨天皇の第八皇子なり、承和五年皇太子と共に禁中に加冠し、正四位下に叙せられ、貞觀十四年に左大臣となれり。嘗て河原院を東六條に營みて、此處に居る結構頗る華麗、毎月難波の潮二十斛を汲み、日々に鹽を煮て、陸奥鹽竈の浦なる景色に倣へたりといふ。正二位、諡

○古今集題しらす

陸奥のしのふもちすり誰ゆゑに

亂れ初めにし我ならなくに

(註)

一、みちのくはみちのかくといふべきを約めたる也。

二、しのふは信夫郡を指す、此處より古昔摺衣を産出して、信夫摺といひたり。

三、もちすりといふは衣の模様を正しくは摺らすして、もちり散らしてすれなり、第四句の亂れにかゝるなり。

四、誰ゆゑは他人の爲にと言はんがことし。

五、亂れ初めにしはもちすりより心の亂れにかけたるなり。

六、我ならなくにとは我れにはあらぬといふ意なり。

七、初二句は序なり。

(解)

他の人の爲に心を亂しはじめたるやうな薄情の人にはあらずして、全く君ゆゑにかくなるを知らずして、つれなく過しなざるか、と少しうらみたるなり。

○或云、第四句は亂れむどかふとある方正しくして、其意は外の人を戀ひて亂れんと思ふ吾心にはあらざるに、外心を有るやうに疑ひ給ふといふなり、云々。

光孝天皇

仁明帝第三の皇子、母は贈皇太后藤原深子なり、神皇正統記に「陽成退ぞけられし時、基經諸皇子を相し申されけり、此天皇一品式部卿兼常陸太守と聞えしが、御年闕にて、小松亭にましくけるに、人主の器量勝されて侍りけるによりて、即ち儀衛を整へて、迎へ申されけり」とあれば、英明なる帝にてはしなりけん。

○古今集上 仁和の帝、みこにおはしけるどきに、人に若菜給へける御歌

君がため春の野に出で若菜摘む

我が衣手にゆきは降りつゝ

(註)

一、君が爲はうなたに送らんと思ふての意。

二、我衣手は已が袖の事前に記せり。

一、つゝも同前。

(解)

うなたに春の若菜を送らんと思ふて、雪が已が袖に積もりつゝるにも拘はらずして摘むとの意。

○或云、親王にましくながら、此の如き辛勞をなさるは、人を御憐愍ある儀にて、此歌も天智天皇のと同じく有心体なり云々。

○或云、而かも親王の御身として、或人の爲に、雪を浚きて、若菜を摘むは、大なる御仁慈の心なりと云ふ人の説は、云ふに足らずして、人に若菜給ふ口しも、雪の降りけるによりて、かくは讀みなし給ひしならん云々。

中納言行平

姓在原^{ありはら}なれば、在納言と號せり、名高き學堂なる樂學院は、元慶五年行平の創めし、氏人の學校なり、性極めて學を好み、和歌の外に丹青をも善くしたること、古史に見ゆ、平城天皇の曾孫なり。

○古今集別題しらす

立わかれいなばの山の峯に生る

まづとしきかば今かへり來む

(註)

一 いなばの山は因幡國法美郡に在り、いなばを行なばに通はせたり。

一生るははえてあると云ふに同じ。

一 まづは松と待つとをいひかけたるなり。

一 いまかへりこむは直に歸りて來るべしの意。

(解)

今は立わかれても思ふ人が待つときくならば直に歸て來るべしと云ふ意なり。

○或云行平因幡國守なりしが其任更つて都へ上るとて思ふ人に讀みて遣はすともいへり云々。

在原業平朝臣

阿保親王第五の子にして中納言行平の弟なり容貌頗る醜陋後世美

少年を見れば業平といふにいたれり嘗て隅田川の渡にて名にしおはといざと問はん都鳥吾思ふ人はありやなしやとの歌を詠せり後人傳へて絶唱古今に冠たりとなす仕へて從四位上右近衛權中將

兼美濃守となれり在玉中將閑麗翁環翠軒は皆な其號なり。

○古今集下二條後の東宮の御息所と申しける時に立田川に

紅葉流れたる圖を書けりけるを題にてよめる

千早振る神代も聞かず立田川

からくれなゐに水くゞるとは

註

一千早振るは神代といはん枕詞なり長く言はゞいちはやぶる嚴忌なり。

一 立田川は大和に在り。

一 からくれなゐは唐紅にて古へ唐土より渡たりしものなれば斯く云ふなり

今は多く紅といふ。

一 水くゞるは泳といふを綏に通はしたる也綏とは糸にて處々をくゞりて紅

紫線などに染むるときにすることなり今のしほりぞめなり。

(解)

立田川にもみち葉が落ちて、奇麗なるしほりをなしたるは神世にも聞かない面白き見物なり、との意なり。

○或云神功皇后三韓を従へ給ふ後やうく韓紅色渡り来れば、神世も聞かずといへるか、又川には錦洗ふといふことのある故に、紅葉の流るゝをかくいふなり、云々。

○或云、紅葉のひらく流るゝかたにて、白波もひまゝ立ち交りつゝ見ゆらんを、紅のゆたと見なせり、云々。

藤原敏行朝臣

右兵衛督従四位上ヤサヲ將敏行ハ左大臣正一位武智恵孫ニテ城塞使事トモテ

樂平の妹の夫なりと伊勢物語にあり、村上帝管て小野道風に今古妙書の最なる者を問ひ給へし時、道風、空海と敏行とを以て答たりと云ふ。實に並び無き書家なりけり。位は従四位上、官は左近衛中將にて卒す。

○古今集二 寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

住の江のきしによる波よるさへや

ゆめの通路ひとめよくらん

(註)

一住の江は攝津にあり。

一よる波は下の夜といはん爲の料なり、上二句は惟夜といはん序のみ。

一ゆめの通路は眠りてさへ思ふ人を怠れない意味にて、其情の切なる意ばへなり。

一よるさへやはよるのゆめといはん爲にして、よるゆめの通路さへやと讀みて心得べし。

(解)

晝間は人の噂を恐れて、しげくは通はれざるに、相思の情が切になりて、夜になりて夢を見るが、その夜の夢でさへ通ふときには、人目を憚るよまア、といふ意なり。

伊勢

其出る所を詳にせず藤原具夏四代の孫、大和守繼蔭の女なりといひ、伊勢守藤原繼蔭の女なりと呼び、寛平法皇の御息所なりと稱へ、又行明親王の母伊勢なりと作る、伊勢家集に「つれの御時にかありけん、大御息所ときこえける御局に、大和國に親もたる人ありけり」とあれば、大和守繼蔭の女といふは當れり、されど猶考ふ可し。

○新古今集一題しらす

難波潟みじかき芦のふしのまも

あはで此世をすぐしてよとや

(註)

一難波潟は攝州の海邊なり。

一みじかき芦といふは、甚だ短しといふ意を添へん爲にて、初二句は序なり。

一ふしの間は、芦の節は短かければ譬へてちよッどの間といひたるなり。

一此世をすぐしてを命を終るまでと思ふは、非なり。

一やの上なるをぞと濁るも亦非なり。

(解)

極めてちよッどの間なれば、過はすに待つて居れ、どの思召か、たとひ一寸の間にもせよ、過はすには居り兼ねる、どの意ならん。

○或云、短き芦の節の間の如き、しばしばかりの逢ふこともなきは、我世をひたすらに戀ひつゝ過ぐせよとの心にやあらん、どの意なりけん、云々。
○或云、思ひ初めしよりこのかた、人にも縁を求め詞をも盡くし、心をも摧き、或はたのめて過ぐし、或は向ふの人影も離れずしても、終に過はで、年月を重ねつれば、さても如何せんなど、思ひあまりて打ち嘆きつゝ言ひ出でたる歌なり、云々。

元良親王

陽成天皇第一の皇子にして、母は主殿頭遠長の女なり、三品兵部卿に

て天慶六年七月薨す。歌合にはかならず時の名ある人と親王とを合せられしも古書に見ゆれば、殊勝の歌學者なりしこと推して知らる。

○後撰集 五事出て来て後に京極の御息所につかはしける。

わびぬれば今はたおなじ難波なる

みをつくしても逢はんとぞ思ふ

(註)

一、わびぬればは逢はれぬを心配して居ればといふ意。

一、今はたおなじは今は又生きて居る甲斐なし、死んだにあなじとの義なり。

一、難波は前に註せり。

一、みをつくしは浮標と身を盡くしと通はせたるものにて、浮標は水の深淺をはかるために難波江に立ちてゐる木なり。

(解)

通ひけることがあらはれて、逢はれぬを心配して居る苦しみは、生きて居る甲斐もないから、いッその事身を無きものとしても逢はうぞとの意なり。

○或云、斯くしひても思ひたえて、わびのみ居れば、いまはた事ありし物思

ひの苦さにななじ斯く同じつらさならんには、尙身を捨てゝだに、逢はんと思ひなりぬると云へるなり云々。

素性法師

僧正遍昭の在俗の時の子にて、俗名を玄利といふ。一説に信時とも書くといへり。當時の歌人にて、清和天皇の時左近衛將監に任ぜらる。其法師となりたるは父遍昭の心なりとあるはさもありけん。

○古今集 四題しらす

今こむといひしばかりに長月の

有明の月をまちいつるかな

(註)

一、今は俗語にてもおなじ、今直にといはんが如し。

一、こむは俗に來やうといふにあたる、未來をいひたるなり。

一、さしばかりには俗に云ふ云つたばかりでなり。

一、長月は九月の異名。
一、有明の月は十六日以後の月をいひたるものにて、此處に書きたるは十四日頃のことならん。必竟は長く待ちたるを斷りたるなり。

(解)

直に來やうと云つたゆゑ、僞りと思はで九月(群)の長々しい夜を、今か々々と待つても、約束の人は來らずして、却つて明け方の月を待ち出した、となげきたる意。

文屋康秀

古今集のはしがきに「詞巧にして其さま身にねはず、いはゞ商人のよき絹着たらんがごとし」とあれば、和歌に長じたる人なりしなり。然れども其祖先はいまだ明かならず、唯、貞觀の頃の人にて、縫殿助に任せられたること史書に見ゆるのみ。天武帝皇子ニ品長親王ノ裔ナリ

○古今集下是貞のみこの家の歌合の歌

吹からに秋の草木のしをるれば

むべ山風をあらとどいふらん

(註)

一、吹からには吹くゆゑにといふにおなじ。一説に吹くと其儘と解す方よろしといふ。

一、しをるとは木の葉が散り、草の色が變はるを云ふ。しをるをしほるとするはさかゝあらん。

一、むべは漢字にて允諾の字にあたり、うべどもあれと意は孰れにしてもおなじ。

(解)

あらきものゝ過ぎた跡は、ものが損するといふが、今山風の吹いた野を見れば、木の葉が散り、草の色が變はれば、げにもあらしとはいふなりとの意。

○或云、山風は嵐となれば、斯くいひたるものにて、詩にも「宜將愁字作秋心」となり。

○或云古今集の序には第二句野邊の草木とあり菅家萬葉には第一句打
ち吹くにと作り又一本に第二句なべて草木のと有り云々

大江千里

參議大江音人の子在原行平の甥なり元慶七年備中大丞に任せられ
延喜三年兵部大丞に上れり漢詩漢文を善くしければ其歌を作るも
亦詩文の意を譯したるもありと云ふ

○古今集上是貞のみこの家の歌合の歌

月見れば千ちにものこふ悲しけれ

吾身一つの秋にはあらねど

(註)

一月見ればは月を見るべきはなり
一千ちといふは數多きことにて下のちの字は一ツ二ツなど呼ぶべきのツに
れなく物を數ふる詞なり

一ここの字勢を強めたり味あべし

一ツは千ちに對していひたるなり

(解)

月を見れば心に様々なる悲みの心起りて吾身獨りのみの秋といふわけには
あらざれどさやうにおもはれて此の上なく悲しいとの意なり

○或云秋と云ふものは天下萬民の秋なるを月に向へば吾身一ツに悲し
みを集めたる心地こそすれど云ふ意なり云々

○或云千里は儒家にて文集中の秀句を題として讀まれたる歌多ければ
此歌も燕子樓中霜月夜秋來只爲一人長といふ句を翻譯したるにや云
々

菅家

名は道具字は三仍つて菅三と呼ぶ即ち北野の天満天神なり貞觀中

文章生に擧げられ、累進して昌泰二年遂に右大臣に進めり。時に左大臣藤原時平少壯にして輕躁、道員と善からず、終に源順等と相謀り、道長廢立を計ると、讒せしかば、帝の逆鱗に觸れ、大宰權帥に貶せられ、延喜三年配所に於て薨す。年五十九。公幼より穎悟人に過ぎ、最も詩文を善くし、君に忠母に孝、其朝廷に在るや、治体に道達して、裁決流るゝが如く、上下其風采を欽慕したりといふ。一條帝の時、左大臣正一位を贈られ、尋いで太政大臣を賜はりたり。

○古今集朱雀院の奈良におはしましける時、手向山にてよめ

此度はぬさもとどりあへず手向山

紅葉のにしき神のまに

(註)

一、このたびは前にも來たが、此の度も、の意なり。
一、ぬさもとどりあへずは幣も取持たずと解すべし、取敢へずと心得るは誤なり。
幣は旅の難儀をさげんために、道祖神に捧ぐるものなり。

一手、向山は奈良の近邊なり、山の名よりして幣を手向すると云ふことに通はしたり。

一、まに、くは萬葉集に隨意に作る

(解)

このたびは、つまらない私共の幣などは捧げ上げ兼ます故持参いたしません。なせなれば、滿山の紅葉は錦のやうなれば、己に神の御心は、幣にあき足りておはせばなり、との義なり。

○或云、此度は院の御幸の供奉にて、あはたいしくて、幣をも用意せざりしゆ。此手向山の紅葉が、錦のやうなれば、是を幣として手向くる程に神の御心のまゝに見給へどなり、云々。

○或云、此度は御幸の供奉の折なれば、正しき私の幣をもとどりあへず、此手向山にまゐりしなり。さりとて、神に一體なく、あるべきならねば、折しも滿山の紅葉、錦の如くなれば、是を幣とせしめしめて、神の御心のまゝに仕給へ、云々と云々なり。

三條右大臣

勸修寺の祖、眞門の孫にして、内大臣高藤の二男なり。延長二年右大臣

從二位に至り、承平二年八月薨す。從一位を贈らる。本名は定方、世に三

條右大臣と稱す。母宮内大弐弘益女。山蔭女。う琴り朝忠朝成朝頼生

○後撰集
戀三女の許につかはしける

名にしおはゞ逢坂山のさねかつら

人に知られでくるよしもがな

(註)

一名にしおはゞは名の通りならばの意なり。しは附けたるのみにて何の義もなし。

一、さねかつらは五味子と書く葦の名なり。づれを小瘰癧にいひかけたるものにて、逢坂山の逢とさねかつらの小瘰癧とが名の通りなればといひたるなり、味深し。

一、知られでの字清むべからず。

(解)

逢坂山のさねかつらと云ふ名の通り、逢ふて寐られるならばどうかして、人には知られないやうに來るしかたもあれかし、と意なり。

○或云、葛を切り斷ちてたぐるは、何處よりとも知らず、未は皆我方に線寄せらるれば其の如く人知れずして、我心に任かするよしもがな、といふ心なり、云々。

貞信公

醍醐帝曾て相工をして、顯位に在る人の相をいはいしむ、相工いへらく、文獻太子容貌美に過ぐ、時平公智數多に過ぐ、道員公才能高に過ぐ、獨り吉に協へたるは、忠平公のみといふ。其後果して久しく朝家に仕へ、榮貴を極め、年七十にして薨す。上下舉つて哀惜せり。公幼より性極め

て、
○拾遺集 亭子院大井河に御幸ありて、行幸もあるべきところなりとおほせ給ふに、このよし奏せんと申し

小倉山峯のもみちばこゝろあらば

今ひとたびのみゆきまたなむ

(註) 一、小倉山は前に在り。

一、もみちばといひたるは下に、よの字を添へて解すべし。

一、こゝろあらばは思ひ遣りがあつたらばといはんが如し。

一、またなんは待居て散らずにあれどの意なり。

一、或本に小倉山もみぢの色も云々とあり。

(解)

只今の仰せによりて、このよしを主上に申し上ぐる上は、定めて行幸もあるべし、それゆゑ夫れ迄は散らずして待ち奉れ、紅葉よといふ意なり。

中納言兼輔

藤原冬嗣の後にく、利基の子なり、寛平十年讃岐權掾となり、後左中將に進み、参議を兼ねたり、延長五年從三位に叙し、中納言に任ぜらる。世に堤中納言といふ。子四人あり、雅正、清正、正実、正ト云フ。

○後撰集 戀五女の許へ遣はしける

三香原^{かほば}わきてながるゝ泉川

いつ見きとてか戀しかるらん

(註) 一、三香原は山城國に在り。

一、わきてながるゝは非常にはやく流るゝことにて、泉といはん縁語なり。

一、泉川も山城國に在り。

一、いつみは、泉川の泉よりいひかけたるものにて、何時見たことがあつてか、云ふ意なり。つの字は清みて讀むべし。

(解)

人に逢たことがあらば、勿論其人を戀ひ慕ふべきことなれども、いつも見たことのない人を、何故にこひしたうことぞ、といひたるなり。

○或云此の歌讀人しらすなるを、新古今集に誤まりて、兼輔卿の歌とて、入られたるを、今はそれに依り給へるなり、云々。

○或云吾が深く相見し人の、今は絶えはて、其顔をも覚えぬばかりなるに、思ひは猶止まず、吾のみ何故に、水の湧く如く、久しくも見ぬ人のこひしくあらんと我と吾心を斷りたるなり、云々。

源宗于朝臣

大和物語に、宇多院の花おもしろかりける頃、南院の五のみこ、これかれあつまりて、歌讀みなおしけり、右京のかみ、宗于云々であるは、此公の事ならん。父は一品式部卿、是忠親王、仕へて正四位右京太夫となり、天慶三年卒す。

○古今集 冬 冬 の歌とてよめる

山里は冬さびしきまざりける

人目も草もかれぬと思へば

(註)

一冬、冬の字に心を置くべし。

一人目、は或説に、人氣といはんが如しとあり。

一かれぬとは冬になりて、草木の枯るゝより、人目のかるゝをいひかけたるものにて、人目がかゝるゝとは、客人の訪ひ來ぬことなり。

一れもへばより山里は云々と解すべし。

(解)

山里は春夏秋冬、いつもさびしきものなれど、冬の外は、花や紅葉などあれば、自然人も訪ひ來れども、冬にいたれば、草が枯るゝ如く、人も訪ね來ずして、其淋さ中々に甚しきなり。

○或云草ものものは、草木といふを含むにあらずして、人目にも對していいたるなり。

凡河内躬恒

和歌に神妙にして、紀貫之と其名を等うし、後人歌聖を評するもの貴
之と躬恒とを推す、古今集撰者の一人なり、其祖先は詳かならず、或は
行氏の孫、龍利の子なりといふ、官位高からず、史に見ゆるところにて
は、和泉權掾及淡路掾、正太位下ナリ、天津彦根命裔ヤリ、(或良高子共云)

○古今集
秋下白菊の花をよめる

心あてに折らばや折らん初霜の

おきまどはせる白菊のはな

(註)

一、心あてにはあて推量といはんが如し。

一、折らばや折らんは俗語に折つたら折られやうといふにおなじ、ばやは、自身
にしやうとする時に用ゐるてにをはなり。

一、置きまどはせるは初霜が降りて花と霜どが見分け難きことをいふなり。

(解)

初霜が降つて、庭一面に白くなり、それが是まで愛して居た菊やらわからんが、
あて推量に折つたら折られやうどの意なり。

○或云、白菊の盛りの程、初霜の降りたる朝、打ち眺むれば、花とも霜とも、色
の分からぬ風情、一面面白く、此を愛する心から、霜の置きまどはすども
折らば折るべきながら、得折らぬ心あるべし、云々。

○或云、此の歌は菊と霜とを共に喜びて讀めるものなれば、決して菊との
み考ふべからず、云々。

壬生忠峯

忠峯も亦古今和歌集撰者の一人なり、初め右近衛大將藤原定國に仕
へける時、定國酒に乗じて、深夜に時平を訪ひしに、時平怪しむこと、面
色に呈れければ、忠峰跪きて、かさゝぎのわたせる橋の霜の上を夜半
にふみわけことさらにこうと即詠せしかば、時平大に喜び、酒宴を張

り、且つ物を賜ひたりといふ、其後後鳥羽院侍臣に古今集の名歌はいつれ予と問はれしに、家隆定家は此ありあけの歌を以て答へ、俊成は此外に一首を添へたりとあれば、古今に希れなる歌道の博士にてありしなり。大足彦国押人命・帝・ミテ右立・門府生ニ付セラル

○古今集三題しらす

ありあけのつれなく見ゆし別れより

曉ばかりうきものはなし

(註)

一、ありあけは前に在り。

一、つれなくは顔目無きを約めたる詞にて、憐むべき事を見聞きて、面強くして、一向感じぬを云ふ或は無伴侶と作るどあり。

一、曉ばかりは曉程なり。

一、うきものは俗語にせつないもの、といはんが如し。

(解)

月は夜半にも入るべきに夜があけても光明かにして、じんぼうつよく見わた

時同会の女にわかれて、しみみかなしき思ひをしてからは、世の中に曉程せつないものはないものこゝろ也。

○或云、女の許へ行きたるに、つれなくして、下紐どくどくとはなく、曉徒に別れ歸りしが、世にうかりし後は、人のつれなかりしはさるものにて、曉ほど憂きものはなしと思ひたるなり云々。

○或云、女の許より歸るに、己れは明けぬとて出るに、有明の月は明るも知らず、つれなく見えしなり、其時より、曉はうく覺ゆると讀めり云々。

坂上是則

坂上田村九四代の孫好陰の子にして、後撰集撰者の一人なる皇城の父なり。延喜年間、大和ノ縁に任せられ、延長年間に五位加賀介となれり。又大内記ニ付セラル

○古今集 大和の國にまかりけるとき、雪の降りけるを見て

よめる。
朝ぼらけ有明の月と見るまでに

(註)

一朝ぼらけは朝開あさひらの轉まがじ詛なまりたるものなり、ひとぼとせとくは五音相通ずればなり。

一見るまでには見ゆる位になり。

一よし野は大和に在り。

一白雪の下に乎文字入れて心得べし。

(解)

朝はやく起きて見ると芳野の里に降りたる雪は、光あざやかにして、ちやうと有明の月の影かと疑はるゝの意なり。

○或云、ありあけの月は光を收めたる朝旦あさに、猶其影乎と見るばかりにといふは、固より謬説にして、こは降りたる雪の月の影かと見まどはるゝをいへるなり。有明の月は、光を收めたるなと推宛おしやてに云ふべきにあらず、其夜の明闇計り知らぬことなり、云々。

春道列樹

作者部類を見るに、延喜二十年壹岐守に任せられ、時に文章生なりと作る。一本には初は六位なりしが、後從五位下雅樂頭とあり。主殿頭しゅけんとう新名宿彌しんしゆくやの一男なりとも見ゆ。詳かなるを得ず。

○古今集下秋志賀の山こえにてよめる

山河に風のかけたるしがらみも

ながれもあへぬ紅葉なりけり

(註)

一山河は山間の小さき川なり。

一風のかけたるしがらみとは、楓もみぢは一体人の造るものなれども、これは風がかけたど興じたるなり。

一流もあへぬとは、流れ能はぬといふに同じ。或は風の吹きかけ吹きかけて

更に隙なく、落つる葉をいふと思ふは少し考過ぎたるなり、風のかく。どあ
らばさもいふべけれど、風のかけて。あ。即ち約めてだ。とあるからは已にあ
ることなり、云々。

一紅葉なりけり、はしがらみ、といふより起りて、その柵は、何かといへば、紅葉で
あつたといひしなり。

(解)

柵は、人の作くるものなれども、此山河に在るものは、風か拵むたるしがらみに
て、即ち風が紅葉を澤山に吹き落して、流れても流れ能はぬ、其紅葉なり、との意
なり。

○或云川の面に充ちたる紅葉にはあらで、浅き瀬にせかれたる、木の葉の
散り重なりたるを讀める、とあるは非にして、水面に満ちたるを、何ぞ柵
とは見成すべき、隙なく吹きかくるとやうに、あわたくしきに見たるは、
後のあへずの詞に泥めるなり、あへずは倉卒のことにあらず、云々。

紀友則

和歌を善くして、榮名を従兄弟なる貫之と等うす。寛平中禁中の歌合
に也友則左列となり、初「いふ題にて」春霞かすみていにしかりがね
はいまどなくなる秋霧の上と書きしを、講師の讀み上げたるに右列
の者春霞と聞きて、其時候を失ひたるを冷笑せしが、第二第三の句を
聞くに及むで笑ひし者皆感嘆したりとあり。歌道の達人なりしこと
推し知るべし。亦古今集撰者の一人なり。

○古今集
春下櫻の花の散るを見てよめる

久方のひかりのどけき春の日に

しづこころなく花の散るらん

(註)

一久方は、日とか空、とかいふ枕詞なり。
一のどけきは俗語にゆつくりといふ意なり。
一春の日なればゆつくりの意あるなり。

(解)

「しづ心なくは静心しづこころなくにして、煩わづしない事也、づの字清むはよろしからず。
日はながく、風は穩ゆたかかに萬物ゆつたりとして居るに、何故に花は煩わづしさうに散ることぞとなり。

○或云、爲家卿に此心といふは、人の心か、花の心か、人の問ひしに、孰れにてもよろしと答へられたり也、然れども花の方勝されり云々。

○或云、押へ字なくて、らんといひたりとて、本未展れる歌は、疑ひの心自ら其中にこもりて、あながちてにをはに拘らざるなり、眼前の儘に、靜心なく花の散る哉、といひつめても争て、ちらん、の意は、言外に聞えて更にまがはぬことなり、ざるをらんとさへ止めたれば、固よりざるこそあらんこと、何の辯を待たん云々。

藤原興風

號じて院の藤太といふ、相摸掾道成の子なり、延喜十一年從五位に叙し、相摸掾となり、延喜十四年下總の大掾に任ぜられきと一書に見ゆ。

○今古集上題しらす

誰をかも知る人にせん高砂の

松もむかしの友ならなくに

(註)

一誰をかもは誰れをまアといひたるなり。

一知る人は知己といふに同じく、友達のことなり。

一高砂は一説に播磨に在りと云ふ、又山の惣名といふも聞えたり。

一松もは俗語に松でさへもといはんが如し。

一昔の友ならなくには俗に昔馴染でないからといふに同じ。

(解)

老木なる高砂の松でさへも昔しなじみでないから、今になりては、誰れをまア

友達としやう、皆死にはてゝしまふたから、惟々獨りになつた、との意。

○或云、誰をかも、とは、何をかも、といふ心にて、人の上に限り、す萬物の上にて、何をか友にせんといふ心なり、といへるは非なり、こは昔の友を慕ふの餘を、非情の松に、さへ、及ぼし、いへるが、あはれにて、歌となれり、云々。
○或云、歌の心は、高砂の松は、心なき木にて、友達にてないから、云々といへるなり、云々。

紀貫之

武内宿禰の後裔なり、和歌に神妙にして、傍ら書を能くせり。定家の評に、貫之が歌は、心巧みにたけられ、よび難し、詞つよく、姿面白きさまを讀みて、餘情妖艶の體を讀まず、それよりこのかた、其姿を酌む者偏にこの姿に赴くといへり。貫之嘗つて和泉國を過ぎけるに、突然馬地上に伏して進まず、傍人いふ、是れ蟻のなすところ、此地に神に通ずる蟻あり。

り侮る可からずといへば、即ち馬より下りて、かきくもりあやめも知らぬおほざらにありと星をばおもふべしやはと咏せしに、馬忽ち進むとを得たりといふ、後人歌仙を撰すれば、貫之を推して右列第一とし、柿本人麿に配せり。著書土佐日記は世の珍重する書なり。

○古今集

上初瀬にまうづる毎に、やどりける人の家に久しく

やどらで程經て後にいたりければ、彼の家の主人かくさだかになん宿はあるをといひ出して侍りければ、其處に立てりける梅の花を折りてよめる

人はいざこゝろもしらず故郷は

花をむかしの香に匂ひける

(註)

いざは否又は不知と書きて、此詞は主人の詞を戯に打ち返へして、人はいざと負けぬやうに讀み出でたるなり。或はいざは勢ある詞にて、勇む勝おほしなと活らき俗の、さうかといふに同じく、覺束なみためらふ意ありといふ。一心もしらずといふ句はいざと合せて、俗に人の心はさうか知らぬと云ふ意。

又た御讀初めの事あり圖書目は左の如し

古今集、後撰集、拾遺集（公任）以上三代集

○後拾遺集（中納言通俊、金葉集（俊賴） 詞花集

（顯輔）千載（俊成）新古今（家隆）以上八代集

○新勅撰（定家）續後撰（爲家）續古今（爲家）續拾遺

（權大納言爲氏）新後撰（前大納言爲世）玉葉（大

納言爲兼）續千載（爲世）續後拾遺（爲藤）風雅集

（秋原法皇）新千載（大納言爲定）新拾遺（爲明）新

後拾遺（爲遠）新續古今（飛鳥井雅世）以上十三代

集 源氏、伊勢、住吉、大和、竹取、おちくば、

岩尾、さごろも、世繼、うづば、以上物語

らずと雖いふも若もしも然しかりとせぬ織屋に協議して餘
分に一二寸を繰り増ふさしむるも亦可あらすや一二
寸の小片を惜みて毎日々々客の來る毎に大勢の小
僧をして戸棚若しくは土藏より幾度となく品物を
出し入れせしめ多くの人力を費やす上に商品に損
傷するは一文惜みの百知らすにあらすや且つ如何
に大勢の番頭小僧を使役したればとて土藏若しく
は戸棚に仕舞ひある一切の奥服を毎客人の前に持
ち出すこと能はざるべきは勿論なれば折角に種々
の商品を貯へながら客人の目に觸れしむるを旨
のみあらす客人も亦此も氣に入らず較も不可な

一故郷といひたるは、此歌にては駒みの家の事
一むかしのは前日の通りのなり。

人の心は替はるたるか、どうかわからぬが、此梅の花のみ、前日の通りに匂ふてくれる故、昔の宿といふことはたしかなり、どのこゝろ也。

○或云、人の心は詞の下にも變するものなるに、増して年をるあつて遇へるには、愈々覺束なし、惟々此の宿の梅ヶ香ぞ昔ながらに匂ひ侍るよりて此水をなつかしと思ふて尋ね來にれりと解くへし、云々。

○或云貫之家集には、題異なりて、昔初鰓にまうづとて、やどりしたりし人の、久う倚らでいきたりければたまさかになん人の家はある、といひ出したりしかばとあり、云々。

清原深養父

先祖詳ならずと一書に在るは謬りならん。天武天皇の皇子舍人親王の裔清少納言の曾祖父なること明かなり。作者部類に「從五位下内匠允にして時に藏人所の雜色」とあり、筑前介海雄、孫・ヒラ曹明介房則、子今集月の面白かりける夜曉方に讀める。

○古今集
夏の面白かりける夜曉方に讀める

夏の夜はまだ宵なからあけぬるを

雲のいつて月やどるらん

一、まだは俗にまゝだといふに同じく、未の義なり

一宵ながらとは萬葉に初夜と書きてあり、夏の夜の短きをいひたるなり
 一いつとは何處なり。

夏の夜は短かくして、まゝだ宵であるときに明かるくなつてながめて居た月が、影を隠したが、其月は何處に影をかくすらんといひたるなり。

○或云、只さへ短夜なるに、月の面白さに、まだ宵ながら明ぬる心地するに
よみて、猶飽かぬ心には、よもや月の入りぬるにはあらじ、雲に宿りて、影
消えしにやと思ふより、雲の何處に云々と讀めり、云々。

文屋朝康

延喜三年大舍人允に任せらる光孝帝の仁和の頃生れし人にして、文
屋康秀の子なりとの説あり。委しき履歷は詳かならず。

○後撰集
中延喜の御時、歌召しければ

しらつゆに風の吹きしく秋の野は

つらぬきどめぬ玉がちりける

(註)

一、吹きしくは吹きしきることにて、俗語にては、引ッ切らずといはんが如し。

二、野はは野にはなり。

三、つらぬきどめぬは、昔時は珠玉を綴りて飾物とせらるの事よりして、露の趣

を玉の貫き綴らぬものに、見立てたるなり。

(解)

秋日の朝野に充ちたる白露の引ッ切らず、吹く風に散れるのは、いかにも見事
にして、綴り纏めない玉のやうなり、と打ち興じたるなり。

○或云、此歌新撰萬葉に出でたるに、今延喜の御時とあるは、覺束なし、極め
て后宮の歌合か、是貞親王家の歌合かの中なり、こは誤謬なるべし、又朝
康彼の歌合の時讀みしを、後に延喜の時奉りしものなるへきかと人の
いふも、同じき誤説なるべし、云々。

右近

交野少將季繩の女なり、大和物語に「季繩少將の女、右近故后の宮にさ
ぶらひけるこそ」とあれば、七條の後継子に仕へし宮女なりけん。

○拾遺集
四題しらす

念らるゝ身をばおもはず誓ひてし

人の命のをしくもあるかな

(註)

一念らるゝ身とは自分の身をいひたることにて、思ふ人に念れられた我身といふに同じ。

一思はずは心にも掛けないといふ意。

一誓ひてしとは下の人にかゝる詞にて、俗語にすれば、神佛に祈つて約束をした人といはんが如し。

一をしくもあるかなとは非常に嘆きたる詞意は文字の通りなり。

(解)

神や佛に願をかけて約束をした其人に捨てらるゝも、自身はあきらめて心にも掛けなが、約束にそむいてしまふた人は、神罰にあたりて、命があるまい、かにも其人の命が惜いなりと嘆きたるなり。

○或云大和物語に男の念れじと萬の事をかけて誓ひけれと、念れにける後に、いひやりける云々とあれば、題しらずとするはあしからんか云々。

参議等

嵯峨天皇の後裔にして、姓は源、中納言希の子なり、元暦四年参議に任ぜられ、同五年一月正四位下に叙せられしが、僅か二月を経て薨す。よし吏に見ゆ。布々嵯峨帝ノ孫ミコト大納言弘ノ子ナリ

○後撰集 一人に遣はしける

浅茅生の小野のしのはらしのふれど

あまりてなごか人のこひしき

(註)

一浅茅生は野の枕詞なり。

一しのはらは萬葉集にある細竹原のことならん所の名にはあらず。

一上二句はしのはれとといはんための料なり。

一しのはれとは首句のしのはらより起りたる詞にて、意は堪へ忍ばんどの考なれとといふなり。

一なごかは何故にかなりかの字に心を注ぐべし。

(解)

てひびどがあるといふことが、人に知れては大事ゆゑ、忍び堪へて包まんとすれども、あまりかへりて、顔にあらはるゝは、何故に又此やうに。人が戀ひしい事ぞ、といひたる也。

○或云、戀しいと思ふも、さのみは見えじと忍ぶも、我心なるを、何とて忍ぶるに餘りて、人の戀ひしくはあるらんと、自らいふかしむなり云々。

平兼盛

和歌を善くして頗る文才あり、大學に入りて、對策及第し、天曆年間に起前權守となり、遂に従五位上駿河守に至る。天徳年中禁中の歌合に和歌を奉り、已の歌の勝を聞きて、拜舞して直に家に歸り、自餘の勝負を見ざりし談は、今に至るも人の笑章とするところなり。正暦元年卒す。時人稱して歌仙といへり。赤染衛門はその女なり。

○拾遺集 一天徳の御時歌合に

忍ふれど色に出にけり我戀は

ものや思ふと人の問ふまで

(註)

一忍ふれどは包まんとすれど云ふことにて、元來此の字は三ツの意ありて、前に解きしはこらへる意、此處のは包む意、又一ツは慕ふ意なり。

一色に出にけりは自身の戀ひしいと思ふ心の顔色に現はれ出でたることなり。

一我戀はそちらの心は如何かは、知らないがを含めたるなり。

一ものや思ふの句はもの思ふやとして考ふべし。

一人の問ふまでとは俗語にては、人が問ふ位にといはんが如し。

一此歌を解くには、第三句を初めに讀みて、其より第一の忍ふれどに來り、第四五二と讀むべし。

(解)

わがこひは、どうかして包まんとすれども、他人が、君は何か心配があるかと問ふ位に顔色にあらはれた、どの意なり。

○或云此歌も忍ぶる戀の年月を経て、思ひ餘る色の人の目に立つて怪しまるゝ心なり。興義抄の、古歌を盗める證のところに、戀さるもさらぬ顔して忍ぶれば物や思ふと見る人を問ふと云ふ歌を今の歌はぬすめる證に出したれど、古歌にはさることも多し、後の人垣を越え、壁を穿つ心とは同じかるべからず云々。

壬生忠見

天徳の初め、攝津大目となり、六位を授かる。嘗て歌合に、平兼盛と配せられしとき、此歌を出して自ら秀絶匹敵なかるべしと思ひて、心算に喜びしが、兼盛の歌もまた頗る神妙にして、判者實賴、孰れとも判決するに能はず、之を醍醐帝の御覽に供せしに、帝屢々兼盛のしづふれを誅じければ、遂に忠見の負となりたり。忠見之を聞て大に失望し、還に憂へて死せり。忠見は忠峯の子家素と清貧然れども、幼より歌道を以て名ありたりといふ。歌集あり今に傳はる。

○拾遺集 天徳御時歌合

こひすてふ我名はまだき立ちにけり

人知れずこそ思ひをめしか

(註)

一、こひすてふはこひ思ひをする。云ふと作るべきを約めたるなり。てふは、いふ、ち、あ、ど、へ、ど、皆同じ意なり。

一、まだきはまへかたまへの早くから、早くなをと同じ。未といふは少し意足らぬ心地す。

一、人知れずこそ、その二字勢強し、心を附くべし。

一、思ひをめしかのしかは清みて讀むべし。

(解)

人しれず、秘内々で思ひはじめたるに、其戀思ひをするといふことがばやく人に知られて、浮き名が立つたことかなと、歎き驚きたるなり。

○或云、我戀ひをするといふことの名が、早くも立ちしものかな、世上の人は、いかゞして知りしことやら、んまだ我思ふ人にさへ、いひ出しもせず

心一ツに思ひそめたるものを、といひたるなり、云々。

清原元輔

下總ノ守春光の子にして、梨壺五人の一人なり。世々和歌を善くし、元輔に至りて、其名最も振ふ。大中臣の能宣と和歌所の寄人となり、萬葉集に調點し、又後撰集を撰ぶ。河内權大目より従五位上肥後ノ守に累進す。正暦元年卒す。年八十三。或は永祿二年に卒し。年七十一。父は下野守顯忠といへり。清少納言の父なり。

○後拾遺集 四心かはりける女に、人に代はりて

契りきなかつみにそでをしほりつゝ

末の松山浪こさじとは

(註)

一契りきなは俗語にいはし約束したがなアといふに同じ。或はきなはけりなを約めたるなりと云ふ。

一かたみは互になり。

一袖をしほりつゝは相思ふことの切なるを形容したるなり。しほりは波に縁

あるなり。

一末の松山は奥州に在る名所なり。

一こさじとは未來をいひたるなり。

一此下の二句は、古歌に、君をおきてあたし心を吾が持たば末の松山浪もこゝな、とあるをぞれり。

(解)

相互に、涙の袖をしほりながら、末の松山を浪が越すことがない通り、此の詞をかへまいと約束はしたがもうそれを隠れてしまふて居るよ、との意。

○或云、思ひかはし、限りは、かたみに打ち泣きつゝ、奈何に成行くらん世なりとも、かはらんすることあらじとは、契りしや契らざりしやとおぼめき向ひて、扱て下の意、さばかり契りしものを、今さらかゝるべしやはとぞがひるなり、云々。

權中納言敦忠

左大臣時平の子なり。和歌及び音楽に通じ、源博雅と其名を等うす。天慶五年に従三位に叙し、權中納言に任ぜられ、世に本院中納言と呼ばる。一説にいふ、敦忠の母は、始め大納言國經の妻となりしが、後時平に嫁して敦忠を生めり、仍て實は國經の子なりといふ。

○拾遺集
戀二題しらす

あひ見ての後の心にくらふれば

むかしはものを思はざりけり

(註)

一あひ見ては相逢ふといはんが如し、

一くらふればは逢ふて後の心と逢はぬ前の心とを比較すればの意。

一むかしは逢はぬ前のこと。

(解)

逢はよものおもひもなくなると思ひしに、さうではなうて、逢つてからの物

思ひは逢はぬ前のよりいみじく、却つて以前の方が、ものおもひがなかりしなりとの意。

○或云、逢はぬ程は、たゞいかにもして、一度の契りをぞ思ふ心、一つのみにて過ぎぬるを、遇ひ見ての後は、猶其の人を哀はれと思ふ心もまさり、又は世の人目いかゞなを思ひ又は其人の心もかはらんや、死やあらん、角やあらんと思ふ心は、昔一筋に逢ふて見ればやなど思ひしは、數ならぬ事になりぬる心をかやうに讀めるなり云々。

中納言朝忠

三條右大臣定方の二男、母は中納言山蔭の女なり。天曆六年參議となり、康和三年中納言に進む。康保三年五十七にして薨す。世に中御門中納言といふ。

○拾遺集
戀一 天曆御時歌合に

あふことのたえてしなくば中々に

人をも身をもうらみざらまし

(註)

一たいていのしは、助字にて意なし。

一中々は俗語にてかへつて、といふ意、或は俗にいつその事に、といふにおなじ。

此歌の重きは、茲に在りといふ。

一人をも身をもは他人も自身もといはんが如し。

一うらみざらましとは、恨まんであらうと云ふ意、まじは萬葉に欲の字を書け

り、願のがなにおなじ。

(解)

逢ふことがあるゆゑ情のなき人を恨み、又自身をも恨むやうになるが、いッその事に一度も遇ふことが出来ぬならば、人をどがめもせずまた自身を責むる事もないであらうよ、そのころなり。

○或云、さすがに相見ること絶えずして、さうて憂きふしの交じれるを、中々に絶えはてたらん中ならば、云々と打ち付けのつらさを、いと責めて

恨みたるかとも問てゆ、云々。

謙徳公

一條攝政と稱せり、性驕奢を好み、父師範の遺誡を奉せず、嘗て大饗の日に臨みて、寝殿の壁色、微に黒きを見て、俄に陸奥紙を以て、之を被へたりといふ。然れども顔る才貌ありて、和歌に最も工みなり、村上帝梨壺五人に命じて、後撰者を撰ばしめしとき、宸翰宣旨を公に賜ひて、和歌所別當を領せしめたりといふ。本名は伊尹、謙徳とは其諡なり。

○拾遺集
戀五

ものいひ侍りける女の、後につれなく侍りて、さら

あはれども云ふへき人は思ほへず

みの徒になりぬべきかな

(註)

一あはれどもは俗語にかゝいさうだといはんが如し、あはれと云ふ詞は、よき

こゝろ、しきま、ど、う、れ、し、き、こゝろ等の心に切なる時に出づる音なり。
 一いふべき人とは茲の意はゆつてくれる人、といふこと。
 一かもほへずは思ひあたらすといはんが如し。一本にすをでに作る。
 一いだづらにとは、楚の意にては、無沐死のこと。

(解)

戀死をすれば、先方にてはかわいさうだ、とゆつてくれる筈なれども、其人もたもへあたらすされば、吾身は無沐死になることかなア、と嘆きたるなり。

○或云死なば共にとも思ふべき、女だにつれなくなりて、省みせぬ上は、増して誰ありてか、我死をあはれむべきなり。との者は、面白あらず。てはあはれども云ふべき人は、つれなくなりて、いふべしどもかもほへずといへるにて、其の人を指すなり。誰ありてかといふにはあらず云々。

曾根好忠

袋草子に「曾丹は丹後ノ掾なり、始は曾丹後掾と號じ、後に曾丹後と號す。ずえに事ありて、曾丹と號せり。此の時好忠嘆じて曰く、何時ゾタといはれんすらん」とあり。

○新古今集
 戀一題しらす

由良のどをわたる舟人楫をたえ

行衛も知らぬこひの道かな

(註)

一由良の門は丹後に在り、ゆらのみなど云ふべきを約めたるならんか。
 一楫をたえは楫を失ひたること、も折りたること、も、同意に解く、孰れにても、舟人の行き方のなくなりたるを云ふ。

一第三句までは先づ序なり、或は比喩なりといひても、解く意は同じ。

(解)

何をしやうどの考もなく、戀々としてなぐさめ兼ねたるは、戀の道かなア、と

げきたるなり。

○或云大海を渡らん舟の楫なくては、便りを失ふべきことなり、其の船の如く吾戀路の頼む便りなく、行衛も知らぬ由なり、由良の渡を打出るより、たけたかくいかめしき歌なり、よく思慮すべし、云々。

惠慶法師

其の祖先を詳にせず、寛和の頃の人にして、播磨國の講師なりといふこと、史に見ゆ、延喜式に昔國々に國分寺を置き、講師・讀師を置かれたり、とあれば、其國分寺の講師を務めたりし人にや。

○拾遺集 秋 あれたる宿に秋來るといふことを、人々よみ侍りけるに、

八重葎しげれる宿の淋しきに

人こそ見ね秋は來にけり

(註)

一、八重葎は葎が幾重にも繁り茂りたることなり、葎は草の名なり。一本に庭の淺草と作る。

一、淋しきの下依つての三字を入れて心得べし。

一人こそ見ねは昔の人は見えぬとの意此のこと。及び秋はのはの字共に軽く視るべからず能く味ふべし。

一、秋は來にけりとは嘆き驚きたる意を含めり。

(解)

ひぐらが幾重ともなくしげりて、あれはてたる宿は、ものさびしくして、昔の人は見ねないが、さかの秋は來たりとなり。

○或云葎が閉ぢたるやとは、人の見えたりとも、淋しかるべきに、人の影は見えずして、結句ものさびしきに秋さへ來たよとの意なり、云々。

源重之

清和天皇の子なる貞元親王の孫にして、從五位下源兼信の子なり。從五位下に叙せられ、相摸守左馬助となり、後任に陸奥に赴き、任所に於て卒す。

○詞華集 上冷泉院東宮と申しけるとき、百首の歌奉りけるに
よめる、

風をいたみ岩うつなみの己のみ

くたけてものを思ふ頃かな

(註)

一風をいたみは風がつよさにといふ意

一岩うつなみのは、くただけてといふところへつゝけて意味解き易し。初二句は

序

一己のみは、先方にてはさうでもあるまいが、自身ばかり心配する、この意を、含み。

一く、だけでは波と心とに通はしたるものにて、心の方にていはゞ思を焦して心配することなり。

(解)

風が強き爲め波が岩に打ちかけてくたくることく、心をくだきて、色々心配して居るけれど、それは片思ひにて、人は何とも思はないかなア、といひたるなり。

○或云、動かぬ岩を、人の心によそへ、碎けやすき波を、吾身に倣へていへり。

序歌にて侍れども、是は心こまやかに侍るにや、いとおもしろし、云々。

○或云、此歌は萬葉集に「山伏のこしに附けたるほらのかひを岩にあてく」だけでものを思ふところかなと云ふ歌を、本歌にて讀めり、云々。

大中臣能宣

父は伊勢の祭主賴基なり。大中臣家代々和歌を善くし、能宣に至りて

最も家名を轟かせり。嘗て敦實親王子の日の宴の歌を作りて「千歳までかざれる松も今日よりはきみにひかれてよろつよやへん」と讀み深く自ら其秀絶なるを負ひ、父に見しに、賴基吟咏すること少頃、色を作して曰く、他日若し子の日の宴に侍することを得ば、何の詞を以て之を頌せんといへり、其歌に神妙なりしこと推して知るべし。仕へて正四位下に至る。正暦三年八月卒す。年七十三。梨壺の五人とは能宣

○詞華集望城時次元輔順の五人なり。
戀上題しらす

御かきもり衛士のたく火の夜はもに

晝は消につゝ物をこそおもへ

(註)

一御かきもりは大内の御構を守る者

一衛士のたく火と云ふは、今義解に理門至夜燃火とあるにて明かなり。上二句は序なり。

一夜はもえは胸をこそがすことの心にていひたるなり、一本に夜はもえてと作

るはよろしからず。

一晝は消えつゝとは魂の消えるやうに思ひ入る心にていひたるなり。

(解)

夜はもえなかつ思ひに胸をこそがし晝は魂も消え入るほそ心を苦しめてもの思ひをするとなり。

○或云此の歌六帖には、衛士の燃く火の晝はきゐ夜はもえつゝ云々であり、此集には六帖より取りて入れられたりを見ゆれば、晝夜を打ち換へたるは、撰者の狡猾なるべし。又火と云ふ題の中に在りて作者しらす、能宣集にて此歌見えずざるに能宣と定めて入れられたるは、外に其證ありしにや、云々。

○或云歌の心は序歌なり、夜は電や角と見たき思ひに、胸を苦しむるを、もゆると云ふなり、さらばもゆるにもまかせずして、晝はさすがに人目を包みて、思ひを隠し消したる心、猶苦しき心なり、云々。

藤原義孝

榮花物語に後の少將は、おさなくよりいみじく道心をはして、法華經を甚しく讀みたてまつりて、法師にやなりなまし、とのみおほせらるゝとあり、後の少將とは、兄あに舉賢を前の少將と號する故なり。一覽に藤德公の三男にして、右少將從五位下春宮亮にて、天延二年卒すと云ふ。

○後拾遺集 二女の許より歸りて遣はしどる

君がためをしからざりし命さへ

ながくもがなど思ひけるかな

(註)

一君がための下には、の二字を入れて解し易し。

一をしからざりし命さへは一命を何とも思はず居りし、其命すらと云ふ意、此のさへは俗のさへとは異なり、花の盛に月さへ晴れたり、なぞやうに、物の添ふとき用う。

一ながくもがなは長くあれと願ふ意なりが、なは希望の意にて、下のか、なとは

異なり。

一思ひける哉は共に寝た時思つたと云ふ意にて、過去なり。

(解)

あなたの爲には、一命を何とも思はざりし、其惜しからぬ命すら、共にたのしみて居りたい故千萬年も長く生きて居たいと思つたとなり。

○或云、君がつれなかりし故、生甲斐もなしに思ひしに、かやうに相見ては末の契を長かれと願ふに付けて、惜くも思はざりし命さへも、長くもがなあれかしと思ひしなり、云々。

一昨日までは逢ふことにかへん命は、何とも覺えざりしが、相見て、今朝の心は、一夜にかはりて、長き命を得て、飽くまで相見はやと思ふところなり、云々。

藤原實方朝臣

左大臣師尹の孫、元輔の女婿なり。嘗て東山に遊びて、雨霖に至る、實方花下に雨を避けて、歌を作る。其次日藤原齊信時の帝に侍して、盛んに其妙作なるを嘆賞せしに、行成其人驕慢なれば、歌詞美なりと雖も、讀むるに足らずといへり。實方微かに聞きて、大に憤り、殿上にて笏を以て行成の冠を抛つ。帝見て其不敬を責め、左近衛中將を罷めしむ。然れども其才を惜みて、歌枕を尋ね來れといひて、位一階を進め、陸奥に赴かしむ。長徳四年任所に於て卒す。實方才名頗る高し、其祠加茂橋本に在り、樂平の巖本祠と並び稱せられ、後世和歌を學ぶ人、毎に之を祈るといふ。

○拾遺集 二女に初めていひつかはしける

かくとだににやはいふきのさしも草

さしもしらじなもゆる思ひを

(註)

一、かくとだににせめてかやうに思ふなり、さしもの意。

一、えやはいふきとは下野の伊吹山にいひかけて、其意は、えふことか、云はざればなり。

一、さしも草は漢字にては蓬蒿と書きて、疾治に用ゆるものなり。此物の名よりいひかけ、下のさしもを起したるなり。

一、さしもは俗にさうともといふにあなじ。

一、しらじなは知つて居まいなアとの意。

一、もゆる思とは前にいひし如く、切なる情、草のもゆるに通はせたるなり。

(解)

己が心の中を、かうなりとさへいひやらざれば、此情の切なることもさうとも知つて居まいなアと嘆きたるなり。

○或云、言不盡意のこゝろなれば思ふ丈を詞にいひつくせねば、云々と説くべし。

藤原道信朝臣

大鏡に、權中將道信君いみじき和歌の上手にて心にくき人にいはれ給ひしほさに承はりにきとあれば、和歌の道には深く通じたる人なりしなり、恒徳公の四男にして、母は謙徳公の女仕へて、從四位上に叙し、左中將に上れり、正暦五年年廿三にて卒す。

○後拾遺集
戀 二 女の許より、雪降り侍りける日、歸りてつかはしける

明けぬればくるゝ物とは知りながら

猶うらめじき朝ぼらけかな

(註)

一 明けぬればくるゝは俗に明ければ暮れるといふ。

一 知りながらは知つては居れども也。

一 猶は矢つ張りの意。

一 朝ぼらけは前に詳かなり。

(解)

晝が去り夜が來たり、明けても直に暮れるなれば、又遇ふことも出來ることゝは知つて居れども、矢つ張り別れる時の朝の空がうらめじきとなり。

○或云暮れて必ず逢ふことならんにはさばかり歎くべきことならねども、再び逢ひがたき中の別ればかり、世に恨らめしい朝ぼらけかなとあやしきまで身にしむ悲さをいへるなり、云々。

右大將道綱ノ母

東三條入道兼家の室にて、本朝古今美人三人の一人なりといふこと古史に見ゆ、和歌に巧みにして、未だ異家に嫁せざる前、兼家の通ひたる事を詠みたる歌を集めて、蜻蛉日記といひ、世に傳はる。

○拾遺集
戀 四 入道攝政まかりたりけるに、門をおうく明けぬれば、よみば立ちわづらひぬといひ入りて侍りければ、よみ

嘆きつゝひとり寐るよの明くる間は
て出しける

いかに久しきものとかは知る

(註)

一、なげきつゝは思ひに焦れながらといはんが如し。

一、明くる間は夜の明くることと戸を開くることとに通はせたり。

一、いかに俗の、そんなに也。

一、ひさしきものとかは知るは久しいものと思召すか也。ばは軽く添へたるなり。

(解)

門をあくる一寸の隙さへおそしと思召すなら思ひに焦れながら、まだ明けぬか明けぬかと待つても明けぬ其長き間をそんなに久しいものと思召すか、との意。

○或云、蜻蛉日記に此門たゞを給へることを遂に明けずしてかへしまゐらせて明るゐした此方より讀みてつかはしやうに書るはよろしか

らず門明ていはれたる後に彼方より立ちわづらひぬとの給へるを受けて、ワザト負けじに心競ひたるにて、眼の當りの打つけなれば中々あざれて興ある方なり云々。

儀同三司ノ母

前の掌侍貴子といひ又高内侍といふ從二位高階成忠の女にて、中の關白道隆の室なり、儀同三司伊周、中宮定子等は皆其の産むところなり。和歌及び文を善くし、其歌作男子も遠く及ばざるもの多しと云ふ。

因に儀同三司とは、儀三公に同じといふ心なり。

○新古今集 三 中ノ關白かよひうめ侍りける頃

総 愔れじの行末までは難ければ

今をかぎりの命ともがな

(註)

一、愔れじのはじの字との字の間に、約束した事の六字を挿みて考ふべし。

一行未までは難ければ、未長くかはらずにあるはかたきものなれば也。
一命どもがなは俗に命でありたいといはんが如し。
一がなは前にあり。

(解)

互に慰れしと約束した事の未長くかはらずにあるは中々難きものなれば、何時か約束にはづれる事もあらうからうれを見ないために、けふかぎりの命でありたい、このころ。

○或云、初めて逢ふて、互に行未かはらじと契りても、其契りの未遂ぐるは大方難きものなれば、かく逢ふことを思ひ出にて、今日を限りともなれよかしといへる心、尤も哀れなる歌なり、云々。

大納言公任

關白頼忠の長子にして、世に四條大納言と稱せり。性聰敏博く衆藝を

極め、詩歌書音樂一として人に勝さるざるはなし。嘗て道長大井川に三船を浮べ、詩歌管絃各々其才に應じて、其一船に乘らしむ。道長公任に問ふて、足下は多能、其好むところに乘れといひしかば、公任歌船に乗り、あさまだきあらしの風のさむければ、さるもみずばをきる人ぞなきと詠せしが、人に語りて、其詩船に乘らざりしを悔いたりといふ。後僧となり、間寂を樂み、長久二年化す。著書あり、世に傳はる。

○拾遺集 大覺寺に人々數多まかりたりけるに、舊き瀧を見
て讀み侍りける

瀧の音はたいて久しくなりぬれど

名こゝろ流れて猶きこえけれ

(註)

一瀧とは昔時嵯峨帝の賞觀せし瀧なり。

一音を拾遺集には糸と作る。

一たいては水の枯れたること。

一名こそ流れてとは瀧の名の世上に廣り居ることをいひたるなり。流れて、聞

え、けれ等は皆體の縁より讀みたるなり。
一猶は俗にまゝだといはんが如し。
一きて、え、けれは世の中の人に噂はさるゝこと。

(解)

嵯峨天皇の御覽になつた體の水はかれてしまふたが、評判はまゝだなくならんで矢張り國の通り、世の中の人にもてはやさるゝ、どの意なり。

和泉式部

越前ノ守大江雅致の女小式部内侍の母なり。和泉式部と云ふは初め和泉ノ守橘道貞に嫁したればなり。性學を好み和歌を善くし、兼ねて佛道に明かなり、僧性空に贈りし歌に「くらきよりくらき道にぞ入りぬべきはるかにてらせやまのはの月」と、世舉つてその精妙を賞嘆す。上東門院の女房となり、弁の内侍とも云ふ。後藤原保昌の妻となり。

○後拾遺集

三 心地例ならず侍りけるころ、人のもとにつかはしける

あらざらんこの世の外の思ひ出に

今一たびのあふよしもがな

(註)

一あ、ら、ざ、ら、んは此世間を去ることにて、冥土に行かんどの義なり。
一此世の外とは後生の事。
一あ、ふ、よ、しとは思ひ出し草のことにて、樂しさにまれ、嬉しさにまれ、只世にすゐれたる事を指していふ心にて、俗に云ふ地獄の土産に似たり。
一今一度は俗にも「一度」といふに同じ。
一あ、ふ、よ、し、も、が、なは一本にあふこと、も、が、なとあり、孰れにしても逢ひたいと願ふ心。

(解)

重き病の爲に、冥土に行きまじやうから、後生にての思ひ出し草に、どうぞも一度逢ふて見たいとの意。

紫式部

物語の王と稱せらるゝ源氏物語の作者なり、資性敏慧幼なる時、兄の書を讀むを聞きて、四書五經を誦誦せり、父爲時甚た愛撫し、常に人に語つてその男子ならざりしを惜しみきといへり。長じて和漢の書を獵跡し、古今の朝典に通ず、然れども人となり温良恭謙にして、其長所に矜らず。上東門院に仕へしこそ、道長の意に従はざりしことなどは、其日記に詳かなり。初め右衛門權佐宣孝に嫁し、大貳三位を生めり、亦和歌の達人なり。

○新古今集
上

早くよりわらはどもだちに侍りける人の、年頃
經て逢ひたるが、ほのかにて、七月十日頃月にき
ほひて歸りければ、

巡りあひて見しやうれどもわかぬ間に
雲かくれにし夜半の月かな

(註)

一めぐりあひては月の巡ることよりして、久し振りにて、幼年の時の友達に、逢ひたることにいひかけたり。

一みしやうれどもわかぬ間は見たか見ないかはつきり顔を見分けぬ内に、その意數年の後のことなれば、顔も一寸にては分り難ければ、かく云ふなり。
一雲隠れに、しとは月の雲に隠れて見えなくなることに、人の行きて見えなくなることを兼ねたるなり。

(解)

久しふりにて出逢ひしが、其顔を見たか見ないかのうちに、行つてしまふたのは、丁度明月に雲がかゝりて、月が見えなくなつたことに同じ、といふことを含めたるなり。

○或云、雅なじみでありし人に、途中で出逢ふて、其の人か、其の人でないか、まだはきくぞわからぬうちに、月影が山へ入り、其月に後れてはならぬとて歸りしゆゑ、其人をも見失ひし、云々。

○或云、一本に暫時の對面にて別れければ、彼は固ぞ見し人かあらぬかと

見も定めぬ心なり、といふは誤謬にて、しか達も敢へず別かれたるにあらす云々。

大貳三位

辨ノ局と號す、紫式部の女宣孝の子なり、大貳成平の妻となりければ、大貳三位とは云ふ、後一條院の乳母となれり、源氏狹衣といひて文學者の珍重する狹衣は、三位の著作なり。一本に、大貳圓章の妻、後冷泉院乳母とあり。

○後拾遺集
戀三

かれくなる男のおぼつかなくといひたりけるによめる

有馬山猪名のさゝはら風吹けは

いでうよ人を忘れやはする

(註)

一有馬山は攝津に在り。

一猪名野も同國に在り。

一風吹けばは下のそよの二字をいはん爲にて、後なぞに風が吹けばそよくする故に上三句をいひたるまでにて序なり。

一いでそよのいでは發語其本は出の心にて、古書には壓乞乞と作る、うよは俗に云ふさうよと同じ心にて、然の字にあたり、少し輕蔑の意になる也。

一人を忘れやはするとは人を忘れまいか、忘れはしないとの心。

(解)

あなたの御詞は御尤なれを、決して人を忘れはしないといひ、却つてあなたこそ人を忘れるなれとの意を含む。

○或云、おぼつかなくと云ふ詞を受けて、さアそれよ御疎遠にあれば、此方より人を忘れたことか、忘れたことはないに、そなたから御疎遠になさるとなり云々。

赤染衛門

人ど爲り、才思に富み、和歌の英名は和泉式部と相下らず。嘗て其子學周重病に罹り久しく治まらず、赤染自作の歌三首を住吉神社に奉り己が命を以て代らんと乞ひしに、後幾何もなくして本に復せりといふ。又嘗て藤原公任官を辭せんとして、辭表を時の名儒紀實名及び大江以言に托せしに、皆其意に合はず、更に匡衡に乞ふ。赤染匡衡に勸めて、公任の意に投せしむ。公任初めて大に欣び、其表を用ゐしこと、人の知るどころなり。平兼盛の女、匡衡の妻となりて、江侍従を生めり。

○後拾遺集
戀二

中の關白少將に侍りける時、はらからなる人に、ものいひわたり侍りけり。たのめてまうでござりけるつとめて、女に代はりて、

やすらはでねなましものをさよふけて

傾ふくまでの月を見しかな

(註)

一、やすらはでは俗に「つゝ、せず」といふに同じ。

一、ねなましものをとは、寝るであつたものをといはんが如し。

一、さは前「在り、異夜」とも書く。

一、傾ふくとは、月が山に入ること。

(解)

はじめより來ずとあるならば、つゝせずと寝るであつたものを來るといふ約束を守つて待ちながら、遂にあげがたの月のなくなるを見たと、怨みたるなり。

小式部内侍

定家の密勸に、小式部内侍和泉式部が一子にて、形姿世にすぐれて又幾野の道のとよみけん時のおぼねこそ侍りけめといふを見れば、人となり客ぼ知らる。此の歌を詠じてより、才名世上に喧しかりけ

ること史に見ゆ。

○金葉集上

和泉式部保昌にぐして丹後國に侍りける頃、都に歌合のありけるに、小式部内侍歌讀みに取られて侍りけるを、中納言定頼つぼねの方にまうて來て、歌はいかゝせさせ給ふ、丹後へ人は遣はしてけんや、使まうて來ずや、いかに心もとなくればすらんなど戯れて立ちけるを、引きどめてよめる

大江山生野の道の遠ければ

まだふみも見ず天の橋立

(註)

一大江山、生野共に丹波路に在る名所なり。此二句は遠きといはんためにいだしたるなり。

一ふみを見ずは文と踏をいひかけたるなり。

一あまのはしだてとは只丹波を指したるのみ。此天橋立は最も景色の好きところにて、日本三景の一なり。

(解)

丹後は遠くして、大江山生野を通らずば行かないゆゑ、丹よりの書面はまだ來ぬ、となり。

○或云大江山といへば大なる幾野といへば幾何と聞ゆるなり。此の二箇所、丹波路にして有りけるは、内侍が爲に兼て天のなせるやうなり、かやうに遠き境なれば、母の彼國へ下りし後、未だ文通さへ無しといふ心をやがて彼處の橋立に寄せていひかけたり、橋立の名さへ相叶へること奇異なり、云々。

○或云、遣しける使も、易くはえ歸りまうて來ねば、未ださる文をも見侍らずといへるなり、云々。

伊勢大輔

大中臣能宣の孫、祭主轉親の女なり、依つて伊勢大輔と號せり。和歌を

善くし、紫式部和泉式部、小式部等と名を等うす。又同じく上東門院に仕へり、大輔初めて宮に入る時、關白道長側に在りしが、櫻花を獻する者有るを見て、筆硯を取りて大輔に授けたりしに、大輔硯を引き寄せ、墨を取りて靜に磨り、卽座に此の歌を書きしかば、道長を始め座に在る人々、皆拍手して宮中鼓動せしと云ふ。其敏捷概ね此の如し。

○詞華集

一條院の御時、奈良の八重櫻を、人の奉りけるを、其折御前に侍りければ、其花を題にて歌よめど仰せ事をありければ、

いにしへの奈良の都の八重櫻

今日九重にほひぬるかな

(註)

一奈良は所謂南都にて、元明天皇より、光仁天皇まで、七代の都なり。

一九重は天子の御殿をいふ。上の八重より受けて、九重と卽座に考へ附きたること最妙なり。

一にほひは香にはあらずして花の色のことなり。此にほひには三つの意あり

て香聲、色等に用う。一本にほひぬるかなは俗語にていはと云ふにいはれぬと、ころありといはんが如しとあり。

(解)

むかしの奈良の都で、咲いた八重櫻も、時を得て、けふは天子の九重の御殿にてもてはやされ云ふにいはれぬ色深を見する、この意なり

清少納言

歌を善くし、又文に巧みなり、其才筆流るゝが如く、輕快簡潔を以て、雄を源氏物語と争ふ枕草子は、此人の作なり。嘗て一條院の時、藤原皇后雪後に左右を顧みて、香爐峯の雪想ふに、奈何といひしに、清少納言即ち立ちて、簾を上げたり、時人其の敏才を感嘆せりと云ふ。後零落して、村落の茅屋に住みけるに、其地の少年其貧を見て、冷笑せしかば、少納言駿馬の骨を買ふものあるを聞かずやといひて、少年を恥しめして

と又後人の傳へて談柄となすところなり。父は梨壺の五人の一人元輔なり。

○後拾遺集

大納言行成物語などして侍りけるに、門のもののみにこもればどていそぎかへりて、つとめて鳥の聲に催されてといひれあせて侍りければ、夜深かりけん鳥の聲は、函谷の關のことにやど遣はしけるを、立ちかへり是はあふ坂の關に侍るとあればよめる

夜をこめて鳥のそらねははかるとも

世にあふさかの關はゆること

(註)

一夜をこめては夜深きこと。

一鳥のうらねとは函谷關の故事より、行成卿の虚言をいひかけたるなり。

一はかるとは人をだまさんと計ることなり。

一世には物事を切に云ふ時、上に添ふ詞にて、世にあるべからざる行世にうれ

しき事の類なり。

一逢坂は前にもいひし如く地名より相逢ふ事に通はせたるなり

一ゆるさじとは委しくは虚言にだまされるやうな馬鹿な番人にはあらで、心をよく怠らぬ關守が此の逢坂の關を守つて居るから、越ゆることは許すまじとなり。

(解)

むかし鳥のそらごとをそのみて、通れたこともあれど、此の逢坂の關はさやうなることにだまされる馬鹿な番人は居りません。あなたと私との關は、偽にては決して通しません。このことなり。

○或云、行成卿の深夜に歸りて心淺きやうなるをまぎらはさんどて、鳥の聲に催されてと偽りの給へるを、さやうの偽にまぎらはされては逢ひ侍らじとの心をいへるなり、云々。

左京太夫道雅

意名を松君といひ、榮花物語には三位中將と作る、帥、内大臣伊周の子なり。天喜二年七月卒す。

○後拾遺集
戀三

伊勢、齋宮わたりよりのぼりて侍りける人に、しのびて通ひ仕る事を、おほやけにもきこしめして、まもりめなどつけさせおて、このびにもかよはずなりにければよめる

今は惟^たおもひたになんとばかりを

人つてならでいふよしもがな

(註)

一、今はハ俗の、もゝに同じ。

二、たゞハ只、一つといはんが如し。

三、おもひたえ、なんは思ひ切らう、といふ意。

二ばかりはのみ也。

一人つてならでハ人の手を経ず、に眼のあたりといふ意でハ滑むべからず。

(解)

人目にふれて、此の通り逢ひがなくなつたから、もゝ只一つの願ひは、人の手を経ず、に眼のあたりさしむかひにて、思ひ切らうといふことだけでもいふしかたはあるまいか、どの意なり。

○或云此密通の事は、榮花物語玉村菊木綿四手等の卷に委し、此の齋宮は三條院第一の皇女、常子内親王の事なり、云々。

權中納言定頼

前に記し、大納言公任の子なり。寛弘中侍從右近衛少將と也。寛仁元年遂に正四位下藏人頭に進めり。嘗て定頼兼房と飲み互に相習りしが、兼房怒りて其冠を奪はんとし、定頼を追ふ、定頼免れて門に入る、兼房追ふて其家に至り、瓦礫を投じて歸る、時人之を毀る、長元中權中納

官に任せられ、兵部卿を兼ねたり後、薙髪し年五十一にして薨す。定頼
姿容頗る美和歌及び書を善くす嘗て宮殿の傍を書して、正二位に叙
せられしは世人の榮とする所なり。

○千載集 宇治にまかりて侍りけるときよめる

朝ぼらけ宇治の川霧たえぐに

あらはれわたる瀬々の綱代六

(註)

一朝ぼらけは在前。

一宇治川は山城に在り。

一瀬々は瀬毎にどいふに同じ。

一綱代木は宇治川に氷魚といふもの捕らんとて木にたてぬきを入れ、綱代袋
といふものをあて、夜篝火を燈して彼の氷魚を寄せて捕へるものなり。

(解)

夜の程の霧も朝になりてやうくたえぐに成つて来る、其間より瀬毎に構
へたる綱代木の見え初めたるがおもしうしどいひたるなり。

相 摸

一書に女の歌には、赤染右衛門、紫式部相摸は上古に耻ぢぬ歌人なり、

赤染長久二年弘徽殿歌合に左の頭を誅みたりとあり、父は名高き源

三位頼政なり、其相摸と呼ぶは、相摸守大江公資の妻となりたれば也。

○後拾遺集 四 永承六年内裏の歌合に

恨みわびほさぬ袖だにあるものを

こひにくちなん名こころ惜しけれ

(註)

一恨みわびは情なき人を恨みはてい也

一ほさぬ袖とは常に涙が袖に在ることにて常に袖が濡れてあれば袖がくさ
るといふところなり、下句のくちなんを起したる也。

一こひに朽ちなん云々は浮き名の世に出て、汚名を負ふとの如何にも口惜
しうとなり。

(解)

情なき人の爲に恨みわびて袖は涙の多きためにくさるんとするころの上に汚名さへ世間に立ちて名譽がなくなるがくやしいと怒みたる意

○或云、一本につれなきに戀死したりと人にいはれん誠に名をけがすなりといふは誤りにて、こは墓無き戀にあたら名をけがすをいふのみ、死を待つて後をいへるにあらず云々

大僧正行尊

參識源基平の子、年十二にて出家す。四方を遊歴して、佛法の深奥を極めり。嘗て後朱雀帝の妃某の痼疾治し難きを法を以て本に復さしめ、檀口の齋宮の公主の鬼魅を去り、時の帝の腰疾を治め、又越後にて、一女子を蘇生せしめたる事等、實に其術神妙に迫れり。長承四年、年七十九にて化す。行尊又畫を工みにし、人丸の像は世の賞するところなり。

○金葉集上 大峯にて思ひかけず櫻の咲きたりけるを見てよ

める

もろどもにあはれと思へ山櫻

花より外に知る人もなし

(註)

一も、ろどもには相互に也。

一あはれはなつかしい也。

一かもへは思ふて呉れろといひたる也。

一山ざぐらの下によを入れて解し易し。

一知る人もなしは知己なしといひたる也。

(解)

吾がれまへをなつかしと思ふ如く故も吾をなつかしいとおもへて呉れろ山櫻よ此のさびしい山里にてはもとよりの近附はおまへばかりといひたるな

周防内侍

本名を仲子といふ、後冷泉院の女房とも、白河院の女房とも、堀河院の女房とも書く、又周防守棟仲の女とも、周防守繼仲の女とも作る、當時女流中の歌人なり。

○千載集
雑上

きさらきばかり、月のあかき夜に二條院にて、人々
數多居明かして、物語などし侍りけるに、内侍周防
よりふして、枕もがなど忍びやかに云ふを聞きて、
大納言忠家之を枕にとて、かひなを簾の下より、差
し入れて侍りければ、よみ侍りける

春の夜の夢ばかりなる手枕に

かひなく立たん名こそ惜しけれ

(註)

一春の夜とは最も短き夜といふ意を含めり。
一夢ばかりのばかりは程の意にて、夢程の即ち少しのといはんが如し。

一手枕は肘かひなを枕にすること。

一かひなく立たんは俗に云ふ甲斐がないと、肘とを通はしていひたるなり

(解)

短き夜少時の手枕して、何の甲斐もないに、浮き名の立つがいかに口惜しい
となり。

○或云斯く取敢へぬ折ふし、かゝる歌の出来ること、ありたがきや、道綱公
の母のいかに久しきと詠じ、小式部が、まだふみも見ずとよみ伊勢大輔
が、けふ九重といひ此の内侍が甲斐無くないんと云へる、皆即妙なり、云
云。

三條院

諱は居貞、冷泉院の第三子、第一本に、母は贈太皇后超子なり。位に在るこ
と五年、三年に、眼疾を以て位を讓る、寛仁元年出家し、法名を金剛淨と

云ふ壽四十二にして崩す

○後拾遺 例ならずおはしまして位など去らんとれほしめ

志ける頃月のあかりけるを御覽して、

心にもあらでうき世にながらへば

(註)

こひしかるべき夜半の月かな

一心にもあらでは考へ通りにならん、といはんが如し。

一うき世とは世間には心配が多いゆゑかうはいふなり。

一ながらへばは長く生きてあらば也。

一こひしかるべきとは戀しくあるべきを約めたる也此例前に在り。

一夜半の月かなは頗る嘆息の情を含む。

(解)

位を去りてから直きに冥土に赴かんと考へなれど、その考へ通りにならんで心配が多い此のうき世に長く生きてあらば今夜の月を後日その位戀ひしたふものかなと嘆き給ふ意なり。

○或云榮花物語の詞を以て思ふに、古より冬の月は思ひといひならへる、師走の十四日にしも月を御覽じて心にもあらずうき世にと讀ませ給ふて、宮の御前に申させ給ふ誠に心あるべし、帝の御國譲りは御心より出でたるにはあらぬこと現に知られて悲しき御達懷の御製也云々。

能因法師

本名は橘永愷といふ、左大臣諸兄の裔、肥後ノ守元愷の養ふ所となりしかば、或は肥後進士とも作れり。和歌は昔は師匠なかりしを、能因時の歌人長能を師とせしとを始めとす。書に見ゆ、能因性極めて超俗、其行爲常に人を驚かせり。就中、伊勢の舊趾なりとて下車したること、長柄の橋の鈍屑を貯へたること、みやこをばの歌を作りしこと等は、今に至るも猶人口に膾炙するところなり。著書玄々集亦世に傳はる。

○後拾遺集 下永承四年内裏の歌合にて

あらしふく三室の山の紅葉は

立田の川のにしきなりけり

(註)

一、三室の山は大和國高市郡に在り。

一、立田川も大和國に在る名所。

一因にけり、げるといふ詞は、文章にては必ず過去のことなれども、歌にては現在にもなることあり。

(解)

立田の川のにしきは何かとおもへば、まれば三室山なる嵐にふき落されたる紅葉なり、との意なり。

○或云此の歌は、立田川紅葉流る、神南備の三室の山に時雨ふるらしの歌を學びたり、嵐の吹き散らす三室山の紅葉は、立田川に落ちて錦となると云ふ三室山を望めりとも見え、龍田川を臨めりとも見え、唯々是臥達坐論にや、所謂虎を畫きてならず、却つて猫に類するものなり、豈上古の正風体といはんや云々。

良邏法師

其父は未だ詳かならず、蓋し官位の高からざりし人なりけん、母は實方家の童女白菊なり、袋草子にいへるあり、人々大原なる所に遊び行くに、各々馬に騎れり、しかるに俊賴朝臣が俄に下馬す、人々驚いて之を問ふ、答へて此所は良邏が舊房なり、いかでか下馬せざらんやと、いふ、人々感嘆して皆下馬せり。

○後拾遺集
秋上題しらす

さびしさに宿を立ち出でながむれば

いづくもれなれ秋の夕ぐれ

(註)

一、さびしきには秋の夕方は淋しくして堪へがたきまゝにといはんが如し。

一、宿を立ち出でては家を出て、といふに同じ。

一、ながむればとは愛の意は、見廻はすこと也。

一、いづくもれなれは、どこもかはらぬ也。

(解)

秋の夕方は淋しくして堪へがたきまゝに家を出て、四方を見廻はせども、どこも物淋しくて、なぐさむることが出来ぬ、あゝと嘆きたるなり。

○或云、春の曙は面白く、秋の夕は悲きは、さることなれど、後の人はあるが上にも深入して物に泥めり、花を惜み、郭公を待つなども、常の心に思ふばかりの事をよみてこそよけれ、餘りに深からんとするは、中々に淺き心の見ゆるなり、此歌もいさゝか泥みて聞ゆ、云々。

○或云、さびしさも外にはなく、我心の内にこそはあるべけれ、それゆゑ何處へ行きても慰むる仕方無しとの意なり、云々。

大納言經信

資性敏捷、萬藝に通じ、事に處して頗る決斷あり。長元中從五位下に叙し、三河權守となり、累進して承暦の頃正二位に進み、嘉保元年大宰帥

となれり。嘗て白河帝詩歌管絃の三船を西河に浮べ、其能に隨ひて分

ち乗らしむ。經信後れて至る、帝悦ばず、經信即ち地に跪き拜して曰く、

臣船を撰ばず、詩歌管絃何れの船にても上せ給へといひ、遂に管絃の

船に乗じて、詩歌を献せしかば、帝大に欣びたり。後世公任と並べ稱す。

經信又朝廷の和歌會ある毎に必ず與りて、序者又判者ととなりしか

ば、世呼ばて天下判者と稱せり。

○金葉集 師賢朝臣の梅津の山里に、人々まかりて、田家の秋

風といふ事をよめる

ゆふされば門田の稻葉れとづれて

蘆のまろ屋に秋風ぞ吹く

(註)

一ゆふさればは夕暮に同じ。

一門田は門前の田のこと也。

一音づれては風が稻葉を吹き來たりて、といふ意。

一蘆の丸屋は田舎の小屋にて、蘆にて葺き上げて頂上の丸きもの也。

(解)

秋の夕方門田の稻の葉に風が吹いて來たと見ればやがて蘆にて暮きたる小屋にも吹きうめたり、どの意。

○或云、先づ門田の風が門田の稻にそよめきて、後蘆の九屋に吹き來るは人を訪ふ時にも供の人をして、消息いひ入つて、主人は後より入り來るが如し、心なき風に心有らせて讀める也、云々。

祐子内親王家紀伊

紀伊は葛原親王より八代の孫にて、從五位下經方の女なり、紀伊守重雄の妹なれば、紀伊といひたり。又祐子内親王の家に仕へしゆゑに、一ノ宮ノ紀伊ともいふ。

○金葉集 下堀川院の御時、艶書合によめる

音にきくたかしの濱のあだ波は

かけしや袖のぬれもこそすれ

(註)

一音にきくは波の縁にて、意は、噂さの高き也。

一たかしの濱は攝津に在り、一本に大和に在りと作る。

一あだ波とはあだ人の意也、此三句までの意は、世間に心替はりがあると評判されるあだ人と解くへし。

一かけしやは情を通じて、契をかけまじ、どの意。

一袖のぬれもこそすれとは若し約束でもしたならば、後に心配が多くなりて、涙が袖を濡すならんどの意也、かけしもぬれも、皆波の縁なり。

(解)

世間に心替りがあると専ら評判されるあだ人には情を通じて、契りをおけることなどは決してしましめし約束にてもしたならば後に心配が多くなりて、涙にて袖がくさるならんどの意也。

權中納言匡房

式部大輔匡衡の曾孫、信濃守成衡の子なり。資性頗る聰明、四歳にして能く誦し、八歳にして史典に通じ、十一歳にして詩賦を善くす。世人稱して神童といへり。曾て才を負ひて世を憤り、將に山林に遁れんとす。權中納言經任之を諭していはく、卿は命世之才、何ぞ自愛せずして遽に茲に至るかといへり。匡房又毎に人に語つて我れ文學を以て、名譽古人に過ぐ、齡中壽に及ばんとす。然れども唯く蠶人頭を歷ざると、子孫の不似なるを憾となすのみといへり。時に爲房、伊房の兩人亦碩學を以て名あり。時人稱して三房といふ。實は匡房其の魁たり。江帥と呼ぶるは、姓大江にして、大宰權帥となりしゆゑなり。

○後拾遺集
春上

うちのおほいまうちきみの家にて、人々酒たう
べて、歌よみ侍りけるに、遙に山の櫻を望むといふことをよめる

高砂の尾上のさくら咲きけり

とやまの霞立たずもあらなん

(註)

一、高砂は山の事なり、播州の名所をさしたるにはあらず。一本に小高き山を指すどあり。

一、尾上は頂上の事なり、高砂尾上、外山は古人種々の説あれども、茲には記さず、其解し易きものを取れり。

一、外山は前面の低き山を指す。

一、立たずもあらなんは立たずにも、らいたいの意なり。

(解)

高砂の頂上のさくらがいかに美しく咲いたによつては、前面の小山の邊の霞は、たゞすにもらいたいの意なり。

○或云、高く聳えし尾上の花に、外山にたなびく霞のさはるといふ理なし。題にかゝはりて、實景を隠れられしものか、卿の歌にはさしも秀逸の多きを、此を撰びたるは撰者の誤りなり云々。

源俊賴朝臣

其父經信と同じく斯道に通じ、又筆墨にも堪能なり、朝廷及び諸家の歌合に必らず推されて判者となる。基俊と能を争ひて相善からず、嘗て基俊々頼を人に毀りて、彼れ文才なく、惟々和歌を善くするのみといひけるを、俊賴聞いて曰く、文時、朝綱、秀歌あるを聞かず、貫之、躬恒、名詩あるを見ず、基俊の評亦遠からずといへり、世人其温厚に服す。堀河、鳥羽、崇徳の三朝に仕ふ。

○千載集 二權中納言俊忠の家に、戀の十首の歌讀み侍りける時、祈不逢戀といへるを

うかりける人を泊瀬の山おろし

はげしかれとは祈らぬものを

一うかりけるは憂くありけるを約めたる詞

一泊瀬は名高き觀音の在る所なり、昔は貴賤共に、何事も此處に詣うて、祈り

たれば、此歌も其意より起りたる也。

一山おろしとははげしといはん序なり。一本には、山おろしよとあり。

一はげしかれとはの句は、人をよりつゞけて、意解き易し。是もはげしくあれどはを約めたるなり。

(解)

先方がつれないから、何分よろしくおたのみ申すと祈りたるを合點なさらぬか、私の願ひははげしくあれどは申しませんものを、との意なり。

○或云、祈れども祈れども、人の心のつれなければ、たゞはげしかれど祈りたるやうなれば、さは祈らざりしものをとの意也。

藤原基俊

定家の評にちかくは亡父卿^{俊成}則ち此道をならひ侍りける基俊と申しける人、このどもがら末の世のいやしき姿を離れて、常に古き歌を

希へり、此人々の思ひ入つて姿すぐれたる歌は、高き世にもおもひ及びてや侍らんとあれば、基俊の歌に堪能なりし事、吾が贅賛を待たず。右大臣俊家の子にして、門地名望共に高かりし故、又才を貧みて、人に傲り、爲に官位滞滯し、從五位下左衛門佐にて卒はる。

○千載集上

僧都光覺、維摩會の講師の請を申しけるを、度々もれにければ、法性寺入道前關白太政大臣に怨み申しければ、しめちがはらと侍りけれど、又其の年ももれければ、よみて遣はしける。

ちぎりおきしさせもがつゆを命にて

あはれ今年のあきもいぬめり

(註)

一ちぎりおきしは御契約ありしの意、又おきしは下の露の縁ならんか。
一させもが露は題に在る歌なるたゝたのめしめちがはらのさしも、草吾れ世の中にあらんかぎりとは、と云ふより出でたるにて、約束した詞を指したる也、さしものしはせと五音相通ず。

一命にては我、一命のやうに思ふてなり。

一あはれは前に在り。

一秋と姦にいひしは露の縁ならん。

(解)

御契約のあつたしめちが原云々を、我一命のやうに思つて居りしに、あはれちやないか、また今年も御採用なくして、秋が暮れてゆく、どの意也。

○或云恨み云へるにあらす、來年はかならずと云ふ心、今年の秋も往ぬと云ふに含めり、云々。

法性寺入道前關白太政大臣

忠通は關白忠實の長子、嘉承・天永の間、正二位權中納言となり、累進して攝政、關白に上り、遂に四帝の關白、二度の攝政を行へり。性和歌を好み、書を真くし、兼ねて佛學に通ぜり。嘗て父忠實屏風を出して之に書

かしむ意ありて筆の小なるものを出し、かば、忌通孫更に最小の筆
を揮つて、六大字を寫し、に忠實大に嘆賞したりといふ。弟賴長の故
を以て父と善からず、後薙髮して圓觀と號す。年六十八にして化す。
○詞華集 下新院位におはしまし、時、海上遠望といふ事をよ
ませ給ひけるによめる、

わたのはら漕ぎ出て、見れば久方の

雲井にまがふ沖つしら波

(註)

一わたのはらは、海の渺々として廣きこと。

一漕出て、いといひて、舟をいはざるところ面白し

一久方は前に在り。

一まがふは行かひ、散かひなどのかひに、間(ま)の字の添はりたるものにて意は
物の行違ひ入り亂れたるをいひたる也。

(解)

岸にて見ても、濱邊の眺めは、おもしろけれど、廣き海上に漕ぎ出て、見れば海

と空と一樣になつて、いよくおもしろい、その意なり。

崇徳院

天皇諱は顯仁、鳥羽天皇の第一皇子にして、待賢門院の産む所なり。五
歳にして位に即き、在位十八年。上皇其寵子體仁に位を譲らしむ。體仁
崩じて後天皇の子重仁位に即かんとす。美福門院之を拒み、遂に後白
河を立つ。天皇及び賴長等大に望を失ひ、遂に兵を擧ぐ。事成らずして
賴長爲義等死し、天皇亦讃岐に流され、壽四十六にして配所に崩す。

○詞華集 上題しらす

瀬をはやみ岩にせかるゝ瀧川の

われても末にあはんどぞ思ふ

(註)

一は、やみは、はやさに也。

(解)

一、岩にせかるゝとは、急瀬の水が岩や石に衝き當ること也。
 一、瀧川は山間に在る急川也。
 一、わかれては水の岩石に衝き當りて、二つにも三つにも分るゝことより、いひかけたるにて、意は苦勞な目に遇つてと解く。或書に互に別れて居る、といふもあり。
 一、末に逢はんとは、水が岩石に衝き當りて分れても、後に一處になることを、今は男女互に別れて居りても、後には相逢ふと云ふに譬へたる意ならん。
 今は事情がありて、別れて居ても、後終に相逢ふて、樂しむ事もあらう、どの意なり。
 ○或云、一本に「行きなやみ岩にせかるゝ谷川のわれても末に逢はんとぞ思ふ」とある方正しからん。意はよしや包むも限りこそあれ、終には世に打出ても、逢はでは止まじと思ひなれりとなり云々。

源兼昌

宇多天皇の苗裔美濃守俊輔の子なり。位は從五位下に叙し、官は皇后大進に任せらる。天永三年卒す。堀河院の後百首の作者なり。

○金葉集 關路千鳥といへるをよめる

淡路島かよふ千鳥の鳴く聲に

幾夜ねざめぬすまのせき守

(註)

一、淡路島は南海に在る島なり。島の下にへの字を置きて解くべし。
 一、鳴く聲にとは、鳴く聲の爲に也。
 一、幾夜とは俗にいくばんと言はんが如し。
 一、ねざめぬとは、ねざめぬるやの意にて、彼方へ向ての詞なり。
 一、須磨のせきもりの下にはの字を添へて心得べし。

(解)

たと一夜の旅寝でさへ、わびはてたる千鳥の鳴く聲を、玆のせきもりは幾ばん

聞き居るものか、さそわびしからん、その意なり。

左京太夫顯輔

藤原魚名の苗裔、顯季の季子なり。堀河爲羽崇徳、近衛の四朝に仕へて正三位左京太夫皇后の亮に至る。顯輔性歌を好み、一時の領袖たり。歌人なりし清輔重家顯昭法師なほは皆其の子にして崇徳帝の勅を奉じて詞華集を撰べり。

○新古今集上 崇徳院に百首の歌を奉りける時

秋風にたなびく雲のたに間より

もれいつる月の影のさやけさ

(註)

「たなびく」は萬葉には露凝又は輕引とかく、厚く蔽ふ雲にはあらず。一本にたなびくともあり。

一雲の絶間より、は欄引雲が秋風に吹かれて、中斷えたるどころより也。

一「さやけさ」は新しく明かなる事。

(解)

薄雲が秋風に吹かれて、少したえくくなる。其間より明月の洩れ出でたるが、一さわおもしろし、となり。

○或云、此歌は陶淵明の「明々雲間月、灼々葉中花」と云ふ詩を本としたるもの也、云々。

待賢門院堀河

待賢門院本名は璋子、崇徳後白河帝の母なり。初め白河帝に養はる、長するに及んで、頗る醜聲あり、故に鳥羽帝其子の崇徳帝を叔父子といひて愛せず。後美福門院の爲に寵を奪はれ、遂に蓬髪して佛に歸せり。堀河は其の女房にて、神祇伯顯仲の女なり。

○千載集 戀三百首の歌奉りける時、戀の心をよめる

ながらん心も知らず黒髪の

亂れてけさは物をこそ思へ

(註)

一、ながらんは一本にながらん、ぬとありて其意は人の心はかわりやすきものなれば深き交りもながくはあるまいとのこと也。

一、心もしらずは心かわりせぬと云ふ事をだしには知り難しとなり。

一、亂れては自分の心の亂れることを黒髪の亂れることよりいひかけて同衾の朝の姿をも含めるが面白きなり。

一、物をこそおもへは心配をすることにてこそその字に切なる情あり軽く見るべからず。

(解)

人の心はかわりやすきものなれば此通りでながくは行くまいからけさはさまぐに心を亂して心配をするどの意なり。

○或云、こは契りの長き短きを如何にと思ひ亂たるにはあらず、只あかぬ別れのやる方なき心亂れを云也云々。

後徳大寺左大臣

名は實定佛名を如圖と云ふ、右大臣公能の子なり、人と爲り類敏にして、頗る學才あり、保元三年權中納言となり、權大納言に上り、尋いで右大臣に進み、遂に左大臣となる。世に後徳大寺と呼ぶ。家藏書頗る多く、常に歌人を書齋に引き、嘲詠して樂しむ、西行法師などは其學友なりと云ふ。

○千載集 夏 曉聞郭公といふころを讀み侍りける。

杜鵑鳴きつる方をながむれば

唯ありあけの月ぞ残れる

(註)

一、鳴きつるは俗に鳴いたといはんが如し。

一、ながむればは小町の處にありし意とは少し異なりて俗のながむるに少し近し。

一、唯の字に杜鵑の見えざる意含めり。

一ありあけは前に在り、あけがた也。

一一首の意隠れたるところなけれども、よく味ふべし、例の通りぞの字に勢を附けたり。

(解)

あけがた眼をさまして居ると、杜鵑が鳴くゆゑ、戸を開けて見たるに、鳥はいつくへか行いて見えず、唯々残りてゐるのは、月ばかりなり、どの意。

○或云、實より待ちあかして、曉方に一聲聞きつるに驚きて、鳴きつる方をながむれば、杜鵑はいつくどもなく飛び失せて有明の月の、其名残りど、おぼしきやうに残りたり、云々。

道因法師

内大臣高藤の後俗名は敦頼仕へて従五位上左馬頭となれり。道因平樂心を和歌に専らにし、年八十に至りても、猶毎月徒歩して住吉社に

思ひわびさても命はあるものを

うきれたへぬは涙なりけり

○千載集
題三題しらす

諸り、秀歌を得んことを祈る。嘗て俊成千載和歌集を撰びしとき、道因の苦心を回想して十八首を探りたるに、一夜道因の靈來りて、厚く謝せしかば、俊成大に感じて、又二首を加へたりしこと、舊史に見ゆ。

一おもひわびとは思ひ極まりはてたりとの意。

一さてもは俗語にさうでも也。

一命はあるものをとは此のやうに情が切なれば、命が無くなるべき道理なれ

ど、さうでもなほ生きて居るものを、どの義也。

一憂きにたへぬとは心配にこらへかぬること也。

(解)

かう思ひ極まりはてしも、命と云ふものはよくこらへきれるものを、餘りにつらきため、耐へがたくして落るものは涙なり、どの意。

皇太后宮太夫俊成

五條三位と稱し、釋阿は其法名、權中納言俊忠の子にして、二條家の祖なり。始め六條家に學びて、顯廣といひしが、後基俊と約して師弟となり、今の名に改む。基俊より古今集の祕旨を受け、和歌を以て朝家の寵を蒙り、仕へて皇太后宮太夫、正三位に至れり。建仁三年、年九十に及び筋力衰耗して、朝する能はず。後白河帝仁和の故事に倣ひて、賀を和歌所に賜ふ。世人以て至榮となす。著はすところの古來風跡抄は學者の珍藏なり。

○千載集
中述懷の百首の歌よみ侍りける時鹿の題とてよめる歌

世の中よ道こそなけれ思ひ入る

山の奥にもしかぞなくなる

(註) 一世の中よのよの字に深く嘆きたる趣ありて、今は陰方なくて何處へか遁れ

やうかと嘆きたるさまなり。一本に世の中はとあるはいかゞあらん。

二道こそなけれのまうも勢を強めたる文字なり、輕しく見過すべからず。意は憂きことをさぐべき道なしといふこゝろなり。

三思ひ入るの入るを山へ入るといひかけて、一途に思ひ込むことに通はせたるなり。

二玆のしかは前のと異なり、獸の名也。

(解)

あゝ世の中では憂き事をさぐべき道がないから、山の中に遁れやうとすれば山の奥でさへも憂きことあるか、鹿が悲しき聲にて鳴きあるくとなり。

○或云道こそなけれを行ふ道と思ふ人あれども、これは誤りなり。俊成卿の世の中を、無道なりと憚りなくいかで讀み給ふべき云々。

藤原清輔朝臣

續詞華集、與義抄、初學抄、一字抄、牧笛記、今撰集、袋草子、和歌題林等は皆清輔の著述なり。時の歌人俊成、西行法師と其名を等うす。嘗て官位の卑しきを傷み、和歌を以て其意を朝家に訴へしに、遂に擯んでられて正四位下、太皇太后、大進兼長門ノ守となれり。兼實嘗て和歌を清輔に受く、卒するに及び嘆じて曰く、嗚呼先生去つて歌道も亦湮ぶといへり。世に重んぜられたる此の如し。祖父は顯季、父は顯輔なり。

○新古今集下題しらす

ながらへば又此の頃やしのばれん

うしとみし世ぞ今はこひしき

(註)

- 一、ながらへばは長命にてあるならば也。
一、又は此の上にの意にて、今現に昔を戀しく思ふ其の上にもとなり。
一、このころは當時のこと。
一、しのばれんとは、憂き世ぞ思つて居る此の頃を後にこひしくならうとの意なり。

(解)

年月に憂きことが澤山になりて、今日は昔の心配が少なかつた日だ、こひしきゆゑ又後になれば憂き世なりと思つて居る今日が、こひしくなるだらう、その意なり。

○或云、此歌を白氏文集の老色日上面、歡情日去心、今既不如昔、後當不如今、と云ふ詩より取りたりと云ふは、いかゞ云々。

俊惠法師

源俊賴の子なり。歌道に明かにして、頗る其父の風あり。俊成嘗て評して曰く、父の歌は鍛鍊精巧にして、純なし、子の歌亦至巧なれども、其父のどはいかゞあらんといへり。

○千載集二こひの歌とてよめる

夜もすがら物思ふころはあけやらぬ

ねやのひまさへつれなかりけり

(註)

一夜もすがらは夜中といはんが如し。

一ものおもふころとは情なき人を種々と思ひ遣るころはの意なり。

一あけやらぬは一本にあけやらでとありぬの方正しかるべし。

一ねやのひまは寢室の戸の際のことなり。

一さへは人の情なきと含めたるなり、味あべし。

(解)

夜中情なき人のために物おもひをしてはやく夜があけよと思ふころは、いち
わろく明けないで、人の情なきばかりでなく、戸のすきまさへ情なしとなり。

西行法師

藤原秀郷の後裔左衛門尉康清の子、俗名を義清といひ、則清と呼ばれ、或

は憲清に作る、佛名を圓位、大實坊、西行と號せり。始め武人となりて、師
る武衛に通せしが、常に遁世の心あり。嘗て鳥羽上皇義清を檢非違使
に任せんとす。義清其の罪人を捕ふるを忌み、固く辭して拜せず。後遂
に僧となりて四方を遊歴す。値く道に賴朝に逢ふ。賴朝西行より兵衛
を受け、遣るに金猫を以てす。西行辭すれども聽かず。即ち受けて門を
出づ。兒童の遊戲するを見之を予へて去る。時人其氣韻の超俗なるに
服す。建久元年京師にて化す。其の和歌に通じたることは、今いふはを
こがまし。

○千載集
戀 五月前戀といへる意をよめる

なげけとて月やはものを思はする

かこちがほなる我涙かな

(註)

一なげけとては心配をせよといひて也

一月やはものを思はするは、月がものを思はするや否、さうにはあらず、その意。

やはのはの字は、軽くして意味なし。

(解)

月が心配をせよといひて、心を苦しむるか否さうでない。このために涙をながしながら月のために流すやうに、かこつけがほする、この意なり。

寂蓮法師

俊成の弟醍醐俊海阿闍梨の子なり。幼少の時より才思人に超えしかば伯父俊成養ひて子となす。仕へて中務少輔に至りしが、俊成の子定家の生るゝに及んで、世を遁れて佛に歸し、寂蓮と號せり。時の僧顯昭、寂蓮と友とし善し、嘗て寂蓮を評して「和歌は易きものなり、寂蓮尙よくせり」といへば、寂蓮之に答へて「和歌は天下の至難なるものなり、顯昭の博學、猶此を善くせず」といへりとか。

○新古今集下五十首の歌奉りける時

むらさめの露もまだひぬ榎の葉に

霧立ちのぼる秋の夕ぐれ

(註)

一、むらさめは村雨なり、一本に暴雨と作る。

一、つゆもまだひぬは村雨の打ちそそぎて、きら／＼と榎のしめりたる姿。

一、榎は一本に多く、深山に在るものなりとあり。

一、霧立ちのぼるは秋の夕なればなり、其景深く味ふべし。

(解)

秋の夕方山里に村雨うちそそぎて、きら／＼と榎の葉のしめりたる、其折むらくと夕霧のたちのぼるは、いかにいはいれぬ好景色なりとあり。

○或云、楚辭にも「山峻高以蔽日兮，下幽晦以多雨」とありて、深き山の有様かくの如し、時節秋にして又夕なれば、深き山里の感情、榎の露やがて袖をもうるほすべし、云々。

皇嘉門院別當

具平親王の裔大藏卿師澄の孫女にして父は太皇太后宮亮俊隆なり。
皇嘉門院聖子に仕へしゆゑ此の名あり。聖子は忠通の女にして崇徳
の後なり。

○千載集
戀三攝政右大臣の時家の歌合に旅宿逢戀といへる心
をよめる。

難波江のあしのかりねの一夜ゆゑ

みをつくしてや戀ひわたるべき

(註)

一難波江といひたるは題なる旅宿に合せ且あしのかりねといはんがため也。
一あしのかりねとは刈根より假寐に通はしたる也前二句は一夜といはん序
なり伊勢がみじかきあしのふしのまといへる歌を見よ。
一一夜ゆゑは只ひとばん枕をかはしたと云ふ意。
一みをつくしては命を終るまでと、薄標とを通はしたるなり。

一こひわたるべきのわたるは難波江の縁なり意はこひしく思ふて月日を過
すこと

(解)

旅宿でたゞ一夜一寸の間枕をかはしたることを忘れがたくて命を終るまで
こひしう思ふて月日をすすことかなアとなげきたる也。

式子内親王

後白河帝の第三皇女なり和歌及び書を善くす加茂齋宮となりて三
宮に准せらる大炊御門齋院といひ又た高倉宮と稱す一本に齋の齋

○新古今集
戀一百首歌の中に忍戀を

玉の緒よたになばたにねなからへば

忍ぶることのよわりもすする

(註)

一玉の緒とは命のと也玉は魂にて緒は何にても連續するものを云ふ仍つて命にいひたる也。

一たえなばたえねとは死するならいッそはやく死ねと云ふ意にて玉の緒の縁なり。

一ながらへばは前に詳かなり是も緒の縁よりいひたる也。

一しのふる事のゝのは俗のがにかなじ。

一よわりも亦緒の縁にて意は忍ぶことの顔色に出づることなり。

一云々ぞするところ普通ならばよわりやせんとあるに斯く治定したるどころ着眼すべし。

(解)

しのびあまる思を無理につゝみながら月日を過すけれどかくしてながくあるならばつひにはしのびかねて思ひが顔にあらはるゝこともあらうからそれよりはいッを只今の内に死ね命よとの義なり。

殷富門院太輔

内大臣高藤の苗裔、白河院判官代行憲の孫、從五位上信成の女なり、殷富門院は式子内親王の御姉なり。

○千載集 戀四歌合し侍りけるとき戀の歌とて讀める

みせばやな雄鳥のあまのうでだにも

ぬれにうぬれし色はかはらず

(註)

一みせばやなは俗に見せたいなど云ふに同じ。

一雄鳥は陸奥に在る名所。

一そでだにもは俗語にそでいさへといはんが如し。

一ぬれにぞぬれしは濡れは濡れた也。

一色はかはらずは舟士の袖はいくらぬれても其色はかはらないが、自分の袖は血の涙にてろまうたりとの意なり。

(解)

漁夫などの着物は、びしよぬれになつても、決して色のかはることはなければ、私の袖はこひにこがれて、たゞの涙は出盡して、今では血の涙の出るを見せないものよ、どのこも。

○或云此歌は、藤原の后、織皇女、英の斑竹の故事より起れり、云々。

後京極攝政前太政大臣

文治年中、權中納言となり、正二位に叙せられ、後累進して大納言に進み、左右の大臣を歴て、太政大臣、攝政となれり。公博く衆藝に通じ、最も歌道に明かなり。建永元年、暴に薨す。或は賊の所爲なりと云ふ。公名は、眞經、法性寺關白の孫、關白兼實の子なり。

○新古今集下、百首の歌奉りし時

きりくす鳴くや霜夜のごむしろに

衣かたしきひとりかもねん

(註)

一、鳴くやのやは嘆息のやなり、此二句はきりくすのなぐしも夜といふ意なり。

一、さむしろは漢字にては小庭又は秋庭と書く。

一、衣かたしきは、九、寐の事。

一、獨りかもねんは俗語にていはゞひとりでねやうかなアとの意。

一、此のものは軽く添はりたる也。

(解)

はださむき霜夜にきりくすさへなきてあはれなる寐屋に、二人寐るならば心のなぐさむべきこともあらうが、たゞひとり九、寐をすることがいかにもさびしいとなり。

○或云、此の歌天然の寶玉なり、古語にして、しかも新しきものなり、毛詩に十月蟋蟀入我床下とあり、上句は此心なり、云々。

二條院讃岐

古の人式子内親王と讃岐を以て、雅經家隆とに比す、其歌道の達人なりしと推して知るべし。多田滿仲の曾孫源三位頼政の女なり。二條院は後白河院の皇子守仁なり。

○千載集 二寄石戀といへるころを

我そでは鹽干に見えぬ沖の石の

人こそしらねかわくまもなし

(註)

一鹽干とは海水の引き退くこと。

一沖の石の下に、如くの字を入れて讀むべし。

一人こそしらねとは沖に在る石の人、に知られない事と已の袖の涙を情夫の知らない事とに通はしたる也。

一かわくまもなしは勿論、涙と石とにひたる也。

(解)

私の袖は海水が引きしりぞいても、現はれない沖の石の如く深くしのびかくすゆゑ、うなたにはしられまいが、かわくことではないとなり。

○或云、吾袖をたどへば沖の石の如くなり、されば常に或所の沖の石はなべて潮干にあらはるゝものなるに、其潮干にもあらはるゝ期なき沖の石の如く、人はぬるゝとも知らねど、乾く間とはなしといへるなり、云々。

鎌倉右大臣

源頼朝の二男母は名高き尼將軍政子なり、童名を千幡といふ。承久元年右大臣拜賀の禮を鶴ヶ岡の祠に行ふ、頼家の子公曉の爲に殺さる。年二十六、實は北條義時の謀るところなりと云ふ。實朝資性溫雅武人たるに似ず、史書を文章博士仲章に受け、歌道を定家に學ぶ。著はす書金塊和歌集世に傳はる。史に云ふ、實朝夙に北條氏の專權を憤り、又皇

室の衰頹を慨嘆し、曾て歌を上皇に奉りて曰く、山は裂け海はあせん、
ん世なりとも君に二心我あらめや

○新勅撰集 旅題しらす

世中は常にもがもな渚こぐ

あまの小舟のつなでかなしも

(註)

一常にもがもなは委しくはと、長く生きて居つて此處へ幾度も來たいと云ふこゝろなり。萬葉には莫とあり。

一つなでは綱手にて、舟に綱附け、手にて引く故かうはいふなり。

一かなしもは萬葉には何と書きて、かなしとも、あはれとも、面白しとも通ず。此處にては深く面白き心なり。

(解)

磯邊近くこぎわたる海士の小舟が綱手を引く時のやうすは、いかにも面白いから此世の中に長く生きて居て、此處へ度々來たいとなり。

○或云、此歌は三四五の句より、一二の句へかへして見るべし、滑溜々海士

の小舟は綱手引くさま、中々外にもとめん心なく、愛すべく面白きによりて、嗟嘆のこうじて哀にかよふところより、さてこそ世の中は不變にてあれ、されど不變にては無きと受けたる、云々。

○或云、此歌は何處の浦ともなければ、古今集に「みちのくはいつくはあれど鹽釜のうらく船のつなでかなしも」とある歌を取れば、其歌につきて、鹽釜の浦とすべし、新勅撰に竊旅に入れたるも此故なり、云々。

參議雅經

新古今集撰者五人の一人、賴經の子にして、宗長の弟なり。建仁、建永の頃、越前介加賀權介より、左近衛少將を歴て、從三位參議に上る。歌道を俊成に學び、門弟中の傑出なり。又蹴鞠に堪能にして、兄宗長と其名を等うす、飛鳥井の祖なり。

○新古今集 下擣衣のこゝろを

みよし野の山の秋風さよふけて

ふるさとさむく衣うつなり

(註)

一、みは、具にてほむる詞也。

一、よし、野は以前齋明天武持統等の諸帝が御幸もあり御殿もありし所なれば、故郷といひたる也。

一、さよふけては前に在り此句は風の身にしむさまを含めり。

一、故郷は即ちよし野なり。

一、衣うつなりといひて寒くなりまさるこゝろを含む歌の氣韵なり。

(解)

吉野山の秋吹く風が身にしむ位なる寒い深夜に衣をうつ聲が遠くきこゆ、となり。

前大僧正慈圓

慈圓性學を好み、身高貴の家に生れながら、苟も一技一能あるものは、賤婦野老といへども、賑恤して金錢を與ふ。史に信濃前司行長が其平家物語に山門の事を優記したるは、實は慈圓の恩に酬へしなりとあり。著はすところの愚管抄世に傳はる。父は法性寺關白始の名は道快、後に今の名に改む。慈圓と云ふは證にして、吉水和尚は其號なり。

○千載集
中題しらす

おほけなくうき世の民におほふ哉

我たつ柚のすみそめのそで

(註)

一、おほけなくは、大膽と云ふ意或は自分不相應、勿体無ひ、不肖、皆此の意なり。

一、うき世の民とは、うき世は前に在り、民とは上一人より下萬民を指したる意にて、天台座主などになれば、國家の安穩を祈るよりして、いへるなり。

一、覆おかなは法華經に以法衣覆之とあるよりいひたるにて、萬民の爲にすること也。

一我、たつ、袖は比叡山を指す、佛敎大師が、あのくだら三みやく三ぼたいのほ
けだちわがたつ袖に冥加あらせたまへといへることよりいひたるか。
一すみろめの袖のすみは墨と住とにいひかけたりとなり。

(解) 法徳つたなき身をも願みず、大膽にも上下萬民安全の御祈禱とて、墨染の袖を
おほひかくるがこは全く比叡山に住む法師の身なればなり、との意也。

入道前太政大臣

名は公經西園寺の祖なり、承元の頃左近衛中將藏人頭となり、後累進
して従一位太政大臣に上れり、寛元二年七十四にして薨す、公經の
妻は頼朝の姻戚の故を以て、京師に於て、大に勢を得、承久の役後鳥羽
上皇の爲に忌まれ、將に暗殺せられんとす、後堀河帝立つて及んで、遂
に専ら權威を張り、孫女を後醍醐及び深草の兩帝に献せり、嘗て佛堂
を北山に構へ、名けて西園寺といひ、園地堂宇の宏大、世に比なかりき。

○新勅撰集上落花の心を讀み侍りける

花さうふあらしの庭の雪ならで

ふり行くものは我身なりけり

(註)

一花さうふはあらしの花さうふと云ふべきを、わさど上下にいひかへたる也。
一雪ならでは俗語に雪ぢやないといはんが如し、此の處尤も着目すべし、花が
散るは恰も雪の如くなれど、降るは雪ぢやない、吾身なりといへる也。
一降り行くは雪のふるど年の経るを通はしたる也。

(解)

あらしが花に吹けば、花はへんくとして雪の如く降る、されをふるものは雪
にはあらずして、年毎に白髪になる吾身なり、との意。

權中納言定家

此の百人一首の撰者なり、治承壽永の頃、正五位に叙せられしが、事に

處して籍を除かれ、後本位に復し、左近衛少將より、左近衛權中將に進み、建歷建保の頃、從三位に叙し、參議に任せられ、治部民部の兩卿を歴て、正三位正二位に進叙し、貞永元年權中納言に任せられ、且つ帶劔を許さる、後薙髮して明靜と號じ、仁壽二年薨す、年八十、詳かなることば前に在り

○新勅撰集 三建保六年内裏歌合戀歌

來ぬ人をまつほの浦の夕なぎに

やくやもしほの身もこがれつゝ

(註)

一まつほの浦、松帆は淡路の名所、松に待をいひかけたる也。
一夕なぎは萬葉集に夕和とあり、夕方水上に風も波もなくして、一面になぎたる意也。

一やくやのやは軽く添へたるものにて、別段意なし、焼くも、しほといはんが如し。

一もしほは萬葉集に藻鹽と作る。

一の字の下に例の如くを入れて心得べし。

一いついは松の意は、一日にあらず引續くこと也。

(解)

情無き人の來らぬをまつ苦しさは松帆の浦にて、夕和に焼く藻鹽のやうに我身もこがれてあはれなり、との意。

從二位家隆

定家と歌名を等うし、又同じく新古今集の撰者なり、壬生中納言光隆の第二子、歌道を以て後鳥羽上皇の至寵を受く、嘗て攝政長經家隆に當人の歌人第一を問ひしに、贈して答へず、歸るに及び、懷中の一紙を遺して出づ、見れば定家の歌なり、又定家新勅撰を撰ぶに當りて、家隆の歌を採る頗る多し、其各々相推許するまど此の如し、凡そ作る所の歌六萬有餘、今に傳ふる所數千首ありといふ、仕へて從二位宮内卿に

至る、蓬髮して佛生と云ふ年八十にして薨す。定家と其年を同うす、亦奇なる哉。

○新勅撰集 寛喜元年、女御入内の御屏風に

風そよぐならの小川の夕暮は

みそぎを夏のしるしなりける

(註)

一風そよぐは風が櫓の葉に吹けば、うよく、する故かういふなり。

一櫓、小川は山城に在る名所のことか。

一みそぎは水無月の河段にて、六月祓といふ、夏祓のことなり。

(解)

風がそよく、と吹きて、いかにもすゝしき櫓の小川の夕景色は、げに秋の心地すれども、六月祓を見れば、初めて夏の證據がある、となり。

○或云、初二の旬、風吹さそふ櫓の小川と云ふことなるを、地名の櫓の線にそよくと讀めるにて、櫓の木が有つて、其に風がそよくと云ふことにはあらざるか、清き水邊に櫓の木は似合しからねばなり、又詞次きに左様

ろに見てはく、くし、地名の櫓の線なればとて、何となくよくといはんは、少し理なきに似たれども、此の頃の歌は、詞續き優美に、歌の姿丈高きと旨として、吹毛の難はあながちに避けざりしが多し、優美なる姿を願ふ人今はた得さりあへぬことなり、云々。

後鳥羽院

高倉院の第四皇子にして、母は藤原弼子なり。壽永二年八月四歳にて位に即き、建久九年十一月十九歳にて位を讓る。承久年中關東の威權朝廷を凌ぐを憤り、將に之を討滅せんとして能はず、爲に隠岐に遷さる。延應元年配所に崩す。壽六十三帝游決顯る驕奢の癖あり、然れども最も文藝に通じ、和歌を工みにし、傍ら丹青に及ぶ。時の歌人定家、家隆等皆帝の至寵を受けたりと云ふ。

○續後撰集 中題しらす

人もをし人も怨めしあぢきなく

世を思ふゆゑ物思ふ身は

(註)

一人をしとは死、人の中に惜く思ひ召さる人のことか。

一人もうらめしとは、今生きて政權を専らにする關東の人が恨めしいと云ふことか。

「あぢきなく」とは思ふこと種々ありて、方なきを云ふ一本に、味氣無にて、和漢共に甘辛、苦酸鹹五つの味にたどへて、心よきを甘し、艱難を辛しなどいふより出で、心に叶はせん術なきを、あぢきなしといへしなりと作る。又一本に、厚氣無の意にて、即ち右は、あつきなしとのみいひて、凡て何の上にも手薄きことをいへりと書く。

一世をおもふとは上句にかゝりて、世をあぢきなく思ふことにて、萬事不如意のこと也。

(解)

萬事不如意にて、いろ／＼と心を摧くによりて、何某が生きて居つてくれたら

ばかうもなるまい、甲乙が政權を握るが恨めしい事かなアとの御思召なり。

○或云關東追罰の御志もありながら、左ありては多くの人民を傷ふことなれば人も惜しく、さりとて見遇し給ふは、日々に惡政興る故人もうらめしい云々。

順徳院

餘は守成といひ、後鳥羽天皇の子なり、承元四年讓を受け、承久三年義時の爲に佐渡に流され、壽四十三にして配所に崩す。増鏡にいふ御心ばへは新院土御門帝よりすこしかさめひてあさやかにぞおはしましける。御さえもやまどから兼ねて最やこどなく物したまふ朝夕の御いとなみは和歌の道にぞ侍りける。末の世八雲などいふもの作くられたるも、此帝の御事なりとあれば帝の爲人はく客きやくば知らるべし。

○新後撰集下題しらず

百敷やふるき軒端のしのぶにも

猶あまりある昔なりけり

(註)

一百敷とは内裏のこと也。百官の座を敷くところよりかは云ふなり。

一やは捨やにて意なし。

一ふるき軒端は帝室の衰へたる標也。

一しのぶは草の名古き家の軒端に生長するもの也。例の幕ふところにいひか
けたる也。

一猶は俗にいふ矢張りなり。

(解)

宮殿の軒端にすら忍草の生ひしほあどろへたる代なれば切に昔がしたは
れて胸にあまる程なり。と御嘆息の心の程今思ふも露けきことにこそ。

明治廿五年二月一日印刷
明治廿五年二月二日出版
明治廿五年十月八日五版

本一冊 金十五錢 郵税毎月一回
正六冊 金八十五錢 一冊注文商金
十二冊 金一圓六十錢 六錢一割増

編輯者兼
發行者

大橋 新太郎
日本橋區本石町三丁目十六番地

印刷者

宮田 務
京橋區宗十郎町十五番地



發兌元 博文館

東京日本橋區本石町三丁目十六番地

壹ヶ年完成女學全書發兌規定

女學全書

全部拾二卷 每編美本
紙 二千五百頁 一冊大判
正價 金拾五錢六冊前金八拾五錢
祝一冊ニ付六錢 每月壹冊發兌シ一
ヶ年間ニ全部出版完成スベシ

治國の要は一家を修むるを先とす、一家を修むるは婦人の任ならずや、大人を鞠育し、英俊を生成する亦婦人に在り、婦人教育の必要なる辨を俟たず、依て今婦道女藝等一切女性の心得べき事は、悉く之を網羅し、本年一月より十二月まで、滿一ヶ年間を期して、此書を大成せんとす、其科目は左の如し

本書科目	
第一編 日本小文典	第七編 書法及大文意
第二編 百人一首略解	第八編 作文法及婦女用文
第三編 歌學捷徑	第九編 禮式並遊戯
第四編 書法大意	第十編 裁縫毛糸縫物法
第五編 室內粧飾法	第十一編 育兒法看病法
第六編 家政整理法	第十二編 衛生法生理大意

100197539

20
CNDX

